大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No. 25　　1990. 12. 31.

目次

大谷大学真宗総合研究所の活性化のために　1
1989年度「指定研究」研究経過報告　2
「開放セミナー」開催　9
大谷大学三百年史に向けて　12
易行院法海と九州学系　19
第2回生涯学習フェスティバルに参加して　24
第2回生涯学習フェスティバルに参加して(Ⅱ)　25

大谷大学真宗総合研究所の活性化のために

所長　武田武麿

本年十月より再び大谷大学真宗総合研究所の業務を引受けることになった。現状の研究所の仕事を改めて始めてみて、大きなとまどいを感じている。というのは現状が、当研究所の創設に参画した者にとって、そのとき望まれていた方向に十全に研究機能を果たしているとは言えないからである。

これまでの短期間に、前所長よりの事務引継ぎ、研究所委員会、指定研究チーフ連絡会と、矢つぎ早の意見を聞く機会を得て来た。その結果、まず何よりも次のようなことが心配されていることが知れた。その一つは、毎年計画案として提出され承認を得て出発したはずの研究課題が、結果としての業績に思うように積み重ねられて来ていないことである。そしてまた，研究組織においては、あってはならぬと最も懸念されて制度化されたはずのことが、懸念されたまさにその状態になっているということである。

私はこの際、充分な判断を持ったとは言えないまでも、現状の研究所について、次のようなまとめと今後の方向性を提案させていただきたい。それは研究所の「活性化」のために「再編化」と「適正化」を計るということである。

「再編化」とはまずなによりも、真宗総合研究所の中核的な研究プロジェクトである「真宗学事研究」と「海外仏教研究」の二つの「指定研究」に関してである。いずれも今年度（1990年度）をもって研究年度の終わりにすることが，多くの意見として述べられたことであった。9年間の永きに渉って続けられた研究であってみれば、継続すべきことは何らかの形で残されるとしても、一旦は発展的に解消され，再編されることが願われている。また、「一般研究」についても全てが当初のままであり、工夫の無いままに公募され、先生方の研究環境の整備に応じているとはいえない。これらについて早急な再整備による充実が望まれているのである。

「適正化」とは、第一に、研究所設立の理念を再確認し、運営と研究の活動全体がそれに即した在り方にあるかどうかと立返ってみることである。第二に、現状の特に、指定研究の研究課題と研究目的に関連して、それに応じた人事と予算の適正な検討が促されているのである。第三は、大谷大学の教育状況が改変されようとしている現在、それに伴っての研究条件の適切な対応が要求されて来るであろうことでる。

90年代の十八才人口の増加と減少による高等教育の環境整備に沿って、大谷大学においてもまず臨時的定員増の措置が為されたところである。学内の教育制度が、今後再編されて学生諸君の変動する質と量に応じた教育環境を創り出していかねばならぬ時点に差し掛かっている。おそらく、それらの動向は一方の「研究環境」にとっては、今までよりもいっそう厳しい状況へ追い込まれていくことが予想される。このときにこそ、先生方のある一定の研究条件を確保し、業績を上げていける環境を確保していく努力を忘れてはならないだろう。

そのためにも、研究所における現状の研究業務の再編と適正による活性化が要請されているのであり、次年度よりの何らかの実施が必要とされているのである。

＜指定研究＞

1989年度

「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」

研究員・チーフ　大竹　鑑

「真宗学事研究」では、1985年度以来、上記のテーマに基づき大学史編纂を目的として近世以降の学事関係資料の収集・整理・研究を進め、着実に成果をあげてきた。本年度も引き続き三分野で資料研究を続けると共に、大学史編纂業務そのものに関する研究にも着手する事となった。

1、「刊　行」

大谷大学及び真宗大谷派学事の歴史を顧みる際に重要と考えられる資料の公開を目的とし、大学史の資料編ともなる真宗学事資料叢書の刊行を進めている。

『上首寮日記』全5巻は、途中断絶・欠落はあるものの、約50年余りに亘り書き継がれた高倉学寮の日記である。これまで3巻を刊行し、現在第4巻（嘉永4年―明治3年）の校正を行っている。また全巻の項目索引の選定作業に着手したが、限られた社会の毎日の記録という資料の性格もあり、項目選定が困難なため中止した。目下「略年表」の作成を検討中である。

「条規集」。寛文年中の学寮草創期から、大学令による大学として昇格した大正14年迄の条規・学則を編纂。このうち高倉学寮時代に関するものは入稿を終え、明治・大正期のものは本山より復刻中の『配紙』『本山事務報告』との照合を行っているため、初稿校正が若干遅れ気味である。また最後に収録する「大谷大学樹立の精神」は、異本があるため、第3代学長佐々木月樵自筆原稿本と、大正14年度「大谷大学要覧」本とを対照できるように併載した。

『厳如上人一代期』。全11冊を3期に分け刊行の予定であるが、第1巻（第1冊、第2冊、第3冊）分の入稿を終えた。解説を付し次年度刊行の予定である。

2、「文献資料の収集・整理」

「学科講座変遷表」・「教職員在職表」は、条規・学則にうたわれた教育理念・構想がどのような形に具体化され表現されているのか、またそれらが時の経過と共にどのように変化してきたかを跡づけるためのものである。昭和24年以降の分についての作業を進めると共に、真宗大学以前の高倉学寮・護法場・貫練教校・大学寮各時代の特色、及び講者における学問の傾向を明らかにするため、安居講義・副講・会読等の内容の分析に着手した。

「大谷大学関係諸雑誌の総合目録」作成。明治34年以来、大学は真宗大学・真宗大谷大学・大谷大学と変遷してきたが、学内研究雑誌には、各時代に於ける教員の問題関心・研究成果が具体的に現れていると考えられる。大正9年創刊され、その後『大谷学報』となった『仏教研究』以前の学内研究雑誌である『無盡燈』を始め、『合掌』『復興』等の研究論文の目録化を進めてきた。しかし近似欄中にも学事史に関わるものが多いため、記事の整理も必要となり、各雑誌の総合目録作成に方針を変更した。『無盡燈』に付いては目録カードをワープロ入力し、検索の便を図るようにした。『合掌』『復興』に付いてもカード化を終了した。

「中外日報」の大谷大学関係記事の収集・整理。マイクロフィルム第19巻から第22巻（昭和6年―昭和12年）迄の収集整理と見出し索引を作成した。記事掲載時既に退職・追放などで大学の籍を離れた人物の動向や論文、さらには宗学院・大谷中学等大谷派関係機関に関する記事も収集した。またこれまで記事の概要を見出しとしていたが、利用者の意見に従い新聞記事の見出しをそのまま用いる事とした。

「学事史年表」作成。「真宗大学寮講義年鑑」（太藤順海編）より作成された編年順・人物別カードの入力を終えた。「真宗大学寮講義年鑑」を始め編纂書物よりのデータ入力が多いため、今後は『上首寮日記』等の一次史料よりの抽出、および校合も併せて行っていかなければならない。

「翻刻・整理」。これまで収集した資料の内、以下のものを件別に編集し、利用の便を図った。「高倉学寮図面集」「香山院龍温手控集冊」「高倉学寮日記集冊」「宮地義天日記」「開華院法住日記」「夏講懸席所化数」。

「資料採訪調査」

前年度に引き続き新潟県下の寺院調査を行った。徳龍・行忠の二講師を出した無為信寺では所在が不明で

あった徳龍画像と、新しく節句祝儀・法話謝礼等を書き留た「封物控」を発見した。講師の経済状態と入寮懸席所化の実数や出身地を知る上で大いに役立つものである。

また行順寺の武田統一氏を訪ね学寮敷地図七点を拝借、写真撮影を行った。

この他、学寮草創に大いに功績のあったとされる唐津市安楽寺一保ゆかりの大垣市廓然寺、岡崎市垣内氏より系図・由緒書き等のコピーを送って頂いた。廓然寺に、学寮草創の功績を賞する大正3年本山下付の褒状が伝来する事、直系の垣内氏所持の系図には学寮草創に関する記載がない事が判明した。垣内氏が明治17年に寺を離れている事、明治22年に本山で学事史の編纂が開始された事等を勘案すれば、一保による学寮草創建言説成立の時期を推測する事が出来よう。

3、「研究」

a 研究会

1、日　時　1989年7月14日
　課　題　「近代の親鸞像―『教行信証』の書誌をめぐって―」
　発表者　研究員　名畑　崇氏

2、日　時　1989年9月22日
　課　題　「高倉学寮草創考―大谷大学のルーツを探る―」
　発表者　嘱託研究員　深田　虎雄氏

3、日　時　1989年12月14日
　課　題　「大谷大学300年史に向けて―近代における大学再形成―」
　発表者　学長・真宗学事研究代表　寺川　俊昭氏

4、日　時　1990年2月20日
　課　題　「順崇・徳龍・行忠の三師について」
　発表者　研究補助員　山口　昭彦氏

5、日　時　1990年2月20日
　課　題　「学寮図面集について」
　発表者　嘱託研究員　深田　虎雄氏

6、日　時　1990年3月19日
　課　題　「近代における教学の課題」
　発表者　嘱託研究員　柏原　祐泉氏

b 講演会

日　時　1990年3月12日
課　題　「龍谷大学史編纂について」
発表者　龍谷大学史編纂委員長　日野　昭氏
大学史編纂に関する具体的な作業方法や、留意点に付いて示唆に富む話をして頂いた。

c 『研究所紀要』7号
「高倉学寮草創考」　深田　虎雄氏
従来充分な検討がなされないまま通説化していた、寛文年中の枳殻邸内の学寮創建、及び筑紫国観世音寺の規模（或いは名跡）移転説を、過去の資料採訪調査の成果をふまえ史料批判と再検討を行った。

d 『研究所報』22号
「近代大谷派教団史に於ける占部観順異安心事件の位置について」
海外仏教研究嘱託研究員　畑辺　初代氏
1988年10月20日に「教団史に於ける信順・請求の法戦の位置について」と題して講演して頂いたものである。

海外仏教研究

「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

研究員・チーフ　長崎　法潤

海外仏教研究班は、1982年度に発足して以来、一貫して、欧米言語によって出版される仏教研究の現状を把握・検討してきた。その主たる目的は、そうした成果を日本の研究者に紹介するとともに、益々さかんになる欧米諸国の仏教研究から、特異で有益な方法論を学ぶことにある。

近年、欧米諸国の仏教研究は、宗教研究の側面において、あらたな方法論を提起している。これらは、欧米における伝統的な学問であるキリスト教神学、哲学研究、文献学、それに加えて社会学的方法論などが有機的に昇華して、新境地を開拓している。また日本においても、積極的に欧米の学問研究の方法論を導入しようとする研究者が多くあらわれている。

そこで、われわれは、その新しい方法論を見極めるとともに、積極的にわれわれの伝統的な方法論をも紹介し、仏教を中心とした学問研究のあり方を問い直していきたいと考えている。

以上の目的に沿って本研究班は研究活動を推進しているが、1989年度の具体的活動としては、以下の5項目を中心に行われた。1)欧米で発表されている著作・雑誌の収集、2)収集された著作・雑誌論文の分析調査およびデータベース化、3)それに基づく書籍目録および雑誌論文目録の作成、4)研究会の開催、5)研究員の海外派遣。これらの成果の一部は『研究所紀要』、『研究所報』に発表されている。

【研究成果】

1989年度海外仏教研究班は上記5項目について、次のような研究成果を得た。

1.　1989年度は318冊の単行本、105種の雑誌を収集し、必要なデータを抽出した。

2. パーソナル・コンピュータによる既収集データのデータベース化を継続した。具体的には、1988年度迄のインド仏教関係論文データ（1400件）を入力した。さらに1989年度収集の雑誌について分析調査を行い、仏教関係論文（511件）を抽出し、データ入力した。

3. 昭和63年度の研究成果である、'BIBLIOGRAPHY OF FOREIGN-LANGUAGE ARTICLES ON JAPANESE BUDDHISM 1960-1987'（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』Vol. 6 掲載）に対する Supplement（補遺、1960-1989）作成のためのデータ（200件）を抽出し、分類を完了した。

4. 研究会は本研究班の重要な活動の一つであり、毎年十件相当開かれている。1989年度以下の如き内容で開催された。

1) 6月8日
「いくつかの大学を訪問して——アメリカの仏教学について——」
本学助教授、安富信哉研究員

2) 7月4日
「Dharma-dharmatā-vibhāga について」
Univ. of Calgary 教授、レスリー・カワムラ博士

3) 7月18日
「アメリカにおける仏教事情——禅・真宗・キリスト教——」
Pacific School of Religion 客員教授、阿部正雄博士
（同じ題目で『所報』No. 23に paper を掲載）

4) 9月4日
'Investigation into Buddhist Literature'
Göttingen Univ., Dr. Siglinde Detz
（この paper は 'Investigation into Buddhist Literature, A Project of the Academy of Science in Göttingen' と題して『紀要』第7号に掲載）

5) 9月8日
「ブータン国立図書館」
フランス国立科学センター研究員、今枝由郎氏

6) 9月19日
'The Concept of Duḥkha in Buddhism -A Comparative Study-'
ジャイナ研究所、Dr. Nathmal Tatia
（この paper は同じ項目で『紀要』第7号に掲載）

7) 9月21日
'The Early Buddhist Yoga -A Comparative Study-'
ジャイナ研究所、Dr. Nathmal Tatia
（この paper は 'The Early Buddhist Meditation' と題して『紀要』第7号に掲載）

8) 10月19日
'Fragments from Historical Records about the Life of Emperor Gongdi of the Song Dynasty'
北京中央少数民族研究所、Prof. Wang Yao

9) 11月2日
「ボディヤ山の観音信仰について」
アジア文化研究所所長、彦坂周氏

以上の如く、1989年度は9回の研究会が開催されている。これらの研究会は、欧米の学者の研究の一端を知り得る貴重な機会であり、また文献資料収集のための重要なアドバイスを受けることができる点で、本研究班にとって不可欠なものである。

研究会の開催に当たっては、京都周辺の8大学8研究機関に案内を送付し、さらに英文による案内状も作成し在日外国人研究者にも門戸を開いている。これにより大谷大学以外からも聴講者を迎えることができ、参加者の増加をみている。

こうした研究会は、研究者の国際的な交流を活性化する意味でも重要な役割を担っていると言えよう。

5. 海外での調査研究は、上記研究会とは別な側面から最新の研究動向を知るために欠かせない活動であり、本研究班では積極的に海外への研究員派遣を行っている。1989年度は国際規模の学会が数多く催され、その内以下の3件について研究員を派遣し、研究者との交流、情報の収集、研究の動向・現状を調査した。

1) 第2回国際ダルマキールティ学会〈ウィーン〉（6月11日—16日）
長崎法潤研究員
この学会において長崎研究員は 'Perception in Pre-Dignāga Buddhist Texts' という題目で研究発表を行い、さらに『研究所報』No.23に「第2回国際ダルマキールティ学会に出席して」と題して学会の状況を報告した。

2) 第9回国際仏教学会〈台北〉（7月26日—28日）
宮下晴輝研究員
宮下研究員は、『研究所報』No.23に「国際仏教学会第9回大会に出席して」と題してこの学会の状況を報告した。

3) 国際真宗学会第4回大会〈ホノルル〉（8月1日—3日）
箕浦恵了研究員、宮下晴輝研究員
箕浦研究員は、『研究所報』No.23に「国際真宗学会第四回大会に出席して」と題して学会の状況を報告した。

※また、前年度安富信哉研究員がアメリカの複数の大学、研究者を訪ねアメリカの仏教研究の現状を調査した。この調査報告は『研究所報』No.23に「いくつかの大学を訪問して——アメリカの仏教研究点描——」と題して掲載された。

【研究の考察・反省】

仏教研究に関する方法論の研究と文献資料の収集は、「海外仏教研究」の課題の二本柱といえる。方法論の研究については、多角的な視点から逐次検討し、成果を公表するであるうが、文献資料の収集についは、以下の諸

点が今後更に検討を加えねばならない課題であろう。

1. まず、文献の収集を行なうに当たり、特に、雑誌に発表された論文を漏れなく抽出するためには、網羅的な雑誌一覧が必要となる。図書資料の整備のための基礎作業として、このような一覧の作成を試みている。しかし、範囲を欧米のものに限定しても、網羅的な雑誌一覧の完成は早急には困難である。そこで、こういった一覧の作成の努力を不断に継続すると同時に、出版した目録についてはサプルメントを作成することにより、その補完を計らねばならない。

2. また、収集したデーターを分類するに当たり、本研究班が独自に用いる分類表は9項目213類に及ぶかなり大規模なものであるが、それでもなおこの分類表の枠に納まらない研究も現われている。しかし、そのため、分類項目を単に増加させることは、全体的な把握のためにも、実用上から言っても良策とは言えない。そこで、現時点での問題点を踏まえ、より普遍的な分類表とすべく、再検討を要すると思われる。

この場合、分類上の汎用性だけでなく、使用上の汎用性にも注意を向けるべきであろう。元来、本研究で用いる分類表は文献目録作成のためだけのものであった。しかし、データの公開・相互利用という観点からすれば、今後仏教図書館協会が作成している分類表等を考慮にいれて、分類表の使用上の汎用性を高めねばならないと言えよう。　(大友康敬・加藤均記)

大学開放と生涯教育の研究

「公開講座・それに関する研究、実施および資料の収集整理」

研究員・チーフ　渡辺　貞麿

「大学開放と生涯教育の研究（以下、「大学開放研究」と略称)」は、本年度より発足し、大谷大学における市民を対象とした公開講座の将来的な開設を視野に置きつつ、その基礎を築くべく、大学開放と生涯教育の視点からの「資料の収集」と「研究」、及び「公開講座の実施」に向けての審議、基本理念の検討を行ってきた。

1.「資料の収集」

大学開放及び生涯教育に関する資料の収集では、現在の社会の動向と、既存の講座にあるさまざまな問題点を探り、それへの批判としての大谷大学の独自性を模索していく所にそもそもの目的があった。その目的に立って新聞記事、各種刊行物（地方自治体・文部省刊行物)、各大学公開講座パンフレット、並びに研究書等を収集した。また大学開放・生涯教育に関する各種の行事等にも参加し、公開講座の関係者へのインタビューも行った。

◇6月23日　「生涯学習懇話会」(於京都ホテル)
／主催；京都市教育委員会
(出席；嘱託研究員　瓏　弘信)

◇9月22日　「生涯学習を考えるシンポジウム」(於京都会館)
／主催；現代教育研究協会
(出席；嘱託研究員　土門政和)

◇10月18日　仏教大学教授國枝利久氏（仏教大学四条センター運営委員）インタビュー（於仏教大学)
(インタビュアー；瓏・土門)

◇11月27日　「大学開放のあり方に関する研究会」(千葉市幕張)
／主催；文部省
(出席；チーフ　渡辺貞麿教授、
研究員　安富信哉助教授、
嘱託研究員　土門・瓏)

また、大学開放・生涯教育をめぐる現代の社会情勢を探るのと並行して、大谷大学における大学開放はいかにあるべきかという普遍的命題を基礎として、その考察の一貫として、谷大自身の歴史に学ぶべく、大正末期から昭和初頭にかけて全国で行われた「大谷大学夏期講座」「大学拡張講座」の背景、精神、及び実像の発掘を目標に、当時の文献資料（『大谷大学新聞』『真宗』他）を調査し、また当時の大学の実情を知る本学名誉教授山田亮賢氏にインタビューを行った。

◇10月31日　山田亮賢氏（大谷大学名誉教授）インタビュー（於願力寺)
／インタビュアー；安富・土門・瓏

◇1990年3月12日　第2回インタビュー（於願力寺)
／インタビュアー；安富・土門・瓏

2. 研究

大谷大学における大学開放はいかにあるべきかを考える上では、大谷大学の建学の理念、その歴史、及び現代社会の現場などから学ぶといった広範な視点が要求される。

そこでまず、過去の大谷大学における大学開放はいかなる精神のもと、いかなる形態のもとで行われていたのかを、谷大自身の歴史に学ぶべく、「戦前の大谷大学開放事業について」というテーマのもと、前述の大学夏期講座に関する研究、資料収集と実像の発掘を行い、その中間報告を嘱託研究員瓏　弘信氏が行った。

また、それをうけてチーフ渡辺貞麿教授が、戦後の学科増設、定員増加にともなう大学開放の動向とその背景を語り、また、各種の公開講座に講師として出講した経験をもとに、現代の風潮に対するアンチ・テーゼとして

の、大谷大学における生涯学習の基本理念（「生涯を学習する」）の発表を行った。

そして、大正期の夏期講座の精神的背景であり、現在もなお大谷大学における大学開放を考える上での原点である「大谷大学樹立の精神」について学ぶべく、本学名誉教授山田亮賢氏に御依頼して第3代学長佐々木月樵の大学開放精神に関する講演を拝聴した。

a．『研究所報』(No22)
「大谷大学と社会—「大学開放と生涯教育の研究」発足に向けて—」　寺川俊昭学長

b．研究例会
1．日　時　9月25日（真宗総合研究所会議室）
講　題　「戦前の谷大に於ける開放事業について」
発表者　嘱託研究員　瓏　弘信氏
2．日　時　11月24日（真宗総合研究所会議室）
講　題　「生涯を学習する—市民と共に学ぶ現場から—」
発表者　研究所長・チーフ　渡辺貞麿教授
3．日　時　12月6日（博綜館第2会議室）
講　題　「佐々木月樵先生に於ける大学開放の願いについて」
発表者　大谷大学名誉教授　山田亮賢氏
なお、この講演は『研究所報』第24号に掲載。

c．『研究紀要』(No7)
「戦前の大谷大学開放事業について—大谷大学夏期講座をめぐって—」
嘱託研究員　瓏　弘信

3．公開講座の実施に向けて

大谷大学で市民対象の公開講座を将来的に開設していくにあたっての諸問題を検討し、研究していく上で通算19回の全体会議を開き、大谷大学独自の大学開放に関する理念を検討し、現実的側面、すなわち講座実施組織と当研究プロジェクトとの位置関係、大学の現状に関する大学開放の視点からの提言などについても審議した。

全体会議
1．日時　1989年5月19日(金)〈17：30～・7名〉
議題　「大学開放と生涯教育の研究」班の発足に当たって
2．日時　5月26日(金)〈17：30～・7名〉
議題　同　（継続）
3．日時　6月1日(木)〈18：00～・6名〉
議題　同　（継続）
4．日時　6月7日(水)〈17：00～・7名〉
議題　公開講座について・その他
5．日時　6月12日(月)〈18：00～・7名〉
議題　公開講座プログラムについて・その他
6．日時　6月21日(水)
議題　（審議なし）
7．日時　7月10日(月)〈17：30～・8名〉
議題　今後の研究課題の検討・その他
8．日時　9月25日(月)〈16：00～・7名〉
議題　戦前の谷大における開放事業について（第1回研究例会）・その他
9．日時　10月25日(水)〈16：00～・7名〉
議題　資料収集についての諸報告・その他
10．日時　11月24日(金)〈17：00～・8名〉
議題　生涯を学習する—市民と共に学ぶ現場から—（第2回研究例会）・その他
11．日時　12月15日(金)〈18：00～・6名〉
議題　文部省主催「大学開放のあり方に関する研究会」出席報告
「第3回研究例会」報告・今後の研究課題の検討
12．日時　1990年1月8日(月)〈16：00～・9名〉
議題　本学独自の公開講座とはいかにあるべきか
13．日時　1月19日(金)〈17：30～・8名〉
議題　本学の独自性と大学開放
14．日時　2月22日(木)〈10：30～・9名〉
議題　大学開放をめぐる諸問題
15．日時　2月26日(月)〈16：10～・9名〉
議題　同　（継続）
16．日時　3月8日(木)〈13：00～・9名〉
議題　同
17．日時　3月15日(木)〈11：00～・8名〉
議題　同
18．日時　3月29日(木)〈16：00～・8名〉
議題　同
19．日時　4月6日(金)〈12：00～・6名〉
議題　平成2年度研究企画・その他

一年間を通して、プロジェクト名の有する意義の重要性を認識し、その精神を確認することにより、プロジェクト名、研究課題名を再検討、プロジェクト名・「大学開放と生涯教育の研究」から「大学開放と生涯学習の研究」に、研究課題名を「公開講座・それに関する研究、実施および資料の収集整理」から「大学開放と生涯学習—その理念と実践の研究」に変更したことが大きな研究成果の一つであった。このような研究の成果をチーフ渡辺貞麿教授がまとめ、研究代表寺川俊昭学長へ報告・提出した。　（瓏　弘信・土門政和記）

西蔵文献研究

「大谷大学所蔵の北京版大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

研究員・チーフ　小川　一乗

大谷大学図書館に蔵される数千点の貴重なチベット語文献コレクションは、大きく2種に分けることができる。第1は、サンスクリットから訳された翻訳文献としての「北京版西蔵大蔵経」および「ナルタン版大蔵経」であり、その中、完本としての「北京版西蔵大蔵経」は、大谷大学所蔵本以外にはパリの国立図書館、ハーバード大学、及びレニングラードの東洋学研究所の蔵する3セットのみが現存する。第2は、チベット人自身によってチベット語で著された所謂「蔵外文献」であり、現在では世界各地の種々の蔵外文献コレクションが知られているが、本学のコレクションは、他に見られない種々の写本類を含み、本学所蔵写本が世界に現存する唯一であるものも多い。本学のコレクションは、かつて大谷大学教授を務めた寺本婉雅（1872—1940）によって北京・青海方面で蒐集されたものを主とし、他にチベット入国の旅の途上、雲南省に消息を断った大谷派僧、能海寛（1868—1901）の収集した若干の文献、さらには近年になってインド、ブータン等より購入・寄贈されたもので構成されている。

西蔵文献研究班はこれらのチベット語文献を整理・研究するとともに、貴重資料を内外に紹介することを目的に組織され、発足以来「北京版西蔵大蔵経」の勘同目録の作成および蔵外文献中に含まれる稀覯書の研究・出版を継続中である。

1989年度の研究経過としては、勘同目録の編集作業の継続の他、蔵外文献の中から、ゲルク派に伝承されている中観学説および論理学説にかんする重要テーマの決択を個々の内容とする次のような6種の文献を『中観学説決択集』の名のもとに一書にまとめて公刊することができた。

【1】No.13949『二諦の決択（*BDEN GÑIS KYI MTHAḤ DPYOD*）』15葉（Ms.Ca, 1-15）
【2】No.13950『量の否定（*THAD ḤGOG*）』24葉（Ms.Ca, 1-24）
【3】No.13951『水流の決択（*CHU ḤBAB KYI MTHAḤ DPYOD*）』13葉（Ms.Ca, 1-13）
【4】No.13952『中観の三世設定の決択（*DBU MAḤI DUS GSUM RNAM BSHAG GI MTHAḤ DPYOD*）』16葉（Ms.Ca, 1-16）
【5】No.13953『中観のアートマン否定の決択（*DBU MAḤI BDAG ḤGOG GI MTHAḤ DPYOD*）』26葉（Ms.Ca, 1-26）
【6】No.13954『アポーハ論の決択（*GSHAN SEL GYI MTHAḤ DPYOD*）』10葉（Ms. 1-10）

これらの6文献は、ニマタンのアーチャールヤ（あるいはラマ）であるシェラブジンパ（Ses rab sbyin pa）によって著されたものであることが、各文献のタイトルに付された著者名あるいは奥書に記された著者名から知られるが、ニマタン（Ñi ma than）とは、チベットにおける学問寺として隆盛を極めたサンプ僧院を構成するゲルク派系の学堂名で、シェラブジンパの正確な生没年は不明であるが、ニマタン学堂の第27代学堂長として17世紀後半に活躍した学僧であった。これら6文献は、大谷大学所蔵本が現存する唯一の写本であり、資料の少ないサンプ僧院系の仏教学を解明する上での貴重な第一次資料となることが期待される。

なお、本書の出版にあたっては、臨川書店との契約に基づき、『大谷大学所蔵蔵外文献叢書』第3巻として同書店から刊行された。本叢書第1巻は、1987年度に出版されたモンゴル人グンポキャブによって訳されたチベット語訳『大唐西域記』、1988年度出版の第2巻は、ダルマキールティの『知識論決択』に対するツァンナクパの註釈書『知識論決択広註“善釈要集”』である。これらは現在当研究所においても取り扱っているので入手希望者はお問い合わせいただきたい。

以上のように、蔵外文献についてはすでに3冊が影印出版されたが、次年度以降も次のような文献の整理と出版が予定されているので最後に報告しておきたい。

(1)No.13972，サキャ派所伝の『倶舎論』古註釈書（写本）
(2)No.13957，『入中論』によるセラ寺教科書（写本）
(3)Nos.13955-13956，アビサマヤ関係論書によるセラ寺教科書集（木版）
(4)Nos.13984＆13987，ウパローセルの文法書（写本）
(5)No.13983，カラーパの文法書（写本）
(6)No.12460，チベット語による中国仏教史（木版）
(7)No.13981，サンプ学問寺歴代管長記（写本）

（松田和信記）

大蔵経学術用語研究

「『大正新脩大蔵経』毘曇部関係典籍における学術用語の研究」

研究員・チーフ　鍵主　良敬

本指定研究は、前年度（昭和63年度）までの3年間を費した指定研究（日本選述の倶舎論関係典籍における学

術用語の総合的研究）が終了したのを受けて、今年度より新たに開始されたものである。そこで本指定研究の目的と研究の経過について概略を紹介したい。

改めて言うまでもないことであるが、『大正新脩大蔵経』は、今日、漢訳の経律論を収録する大蔵経としては最も整備されたものとして全世界の仏教研究者によって利用されている。しかしながら、一口に仏教研究といっても全ての研究者が同一の目的を持ち、共通の方法に依っているというわけではない。そのこと自体の是非を今ここで議論しているわけにはいかないが、いずれにしても立場を異にする研究者が異なる目的と方法を以て大蔵経を利用するのである。従ってその利用の仕方も自ずから異ったものとなってくるわけである。『大正新脩大蔵経索引』は、このような様々な関心を持つ人々が、難解な大蔵経を利用しようとする場合の手引きとなるように企画されたものである。大谷大学は、他の仏教系五大学と共に大蔵経学術用語研究会を組織して、昭和63年度までにその研究成果を9冊の『大正新脩大蔵経索引』として世に送り出し、初期の目的をほぼ完了したところである。しかしながら、今日、改めてそれらの研究成果を振り返ってみるに問題が皆無であると言うわけにもいかないようである。言い換えれば、事業の開始からおよそ30年を経て、当初は予想だにしなかったような問題がいくつか浮び上ってきているのである。そこで、改めてそれらの研究成果に検討を加え、問題を明らかにしてより完成度の高い索引を提供しようとするのが本年度からの研究の目的である。

このような事情のもとに本年度から「『大正新脩大蔵経』毘曇部関係典籍における学術用語の研究」と題する研究が開始されたのである。大正蔵経の毘曇部には、28部659巻の典籍が収められている。そして大正蔵経索引はそれらに対する学術用語研究の結果を「毘曇部」上・中・下の3冊の索引にまとめている。

このうちの「毘曇部下」は、大谷大学の学術用語研究会が、昭和37年3月に刊行したものであり、研究成果としては最初のものである。そしてこの「毘曇部下」は、次の6の典籍における学術用語の整理の結果である。

No.1558　阿毘達磨倶舎論
No.1559　阿毘達磨倶舎釈論
No.1560　阿毘達磨倶舎論本頌
No.1561　倶舎論実義疏
No.1562　阿毘達磨順正理論
No.1563　阿毘達磨蔵顕宗論

これらは、いずれも部派の学説を研究する上で不可欠のものである。就中、世親の『阿毘達磨倶舎論』は、仏教の教義を把握するのに欠くことのできない用語や概念を最も簡潔にまとめた論書として古くから特に重要視されてきた。いわば仏教教理の基礎を説くものとして必読の典籍であると考えられてきたわけである。従ってインドを始めとして中国、チベット、そして日本に至るまで多くの人々によって研究され、註釈書が書かれている。わが国においても『倶舎論』は随分と古い時代から学ばれていたことが知られ、現に南都においては六宗の一つに数えられていたわけである。その伝統は現在に至るまで続いているのであり、索引「毘曇部下」もそうした流れに則したものと言うことができる。しかしながらこのような状況は1967年（昭和42年）を境として大きく変化するに至った。即ち、P. プラダン教授によって『倶舎論』の梵本がパトナから出版されたからである（P. Pradhan, Abhidharmakośabhāṣya ((Tibetan Sanskrit Works Series, vol. VIII)), K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967)。これをきっかけとして、『倶舎論』の研究は主にサンスクリット語によって行なわれるようになり、それにもとづいた重要な研究成果がいくつも発表されている。更に、梵本と漢本、チベット本などとの比較研究も盛んに行なわれるようになり、そうした研究方法の要請に応えるものとして、1973年にはサンスクリット語とチベット語と漢訳（これには玄奘訳の『倶舎論』のみでなく、真諦訳の『阿毘達磨倶舎釈論』も含まれている）とを相互に対照した索引も出版された（平川彰編『倶舎論索引』第1部、第2部、第3部）。このような『倶舎論』をとりまく状況の変化によって、アビダルマ教学の研究はここ数十年のあいだに質量ともに大きく変わりつつあるのである。

こうした様々な事情を踏まえながら、改めて基本テキストとての大正蔵経の重要性を鑑みる時、手引きとしての大正大蔵経索引の果すべき役割りが改めて注目されるわけである。このような課題のもとに本指定研究が企画されたのである。従って本年度は、まず研究の範囲の確認と問題点の明確化ということに主眼をおいて研究を進めた。研究の範囲の確認という点については、まず現行の「大正新脩大蔵経索引毘曇部下」に当面の課題を絞ることとし、それがどのような問題を含んでいるかが主に検討された。本書は、本学の大蔵経学術用語研究会が最初に手がけた索引である。当時、本書の編集に携わった人によれば、範とすべき何物もない状況のもとで、ほとんど手さぐりに近い状態であらゆる作業を進めていかなければならなかったとのことである。その後幾冊もの索引編集を経験して、そこから生み出されてきた原則に照らしてみると本書には少なからず不統一な箇所が存在すると言わざるを得ないようである。その一々について報告することはあまりに詳細に亙るのでここでは省略することにしたい。それらの問題を具体的にどのような形で処理し、索引を再生させていくかということがこれからの課題である。

（織田顕祐記）

公開講座「開放セミナー」開催

待望久しかった本学の公開講座が「開放セミナー」の名で開催されることになった。

学長を代表とする特定研究「大学開放と生涯学習の研究」班によって本学独自の公開講座はいかにあるべきかについて検討が重ねられ、その結果を踏まえて開設に至った。公開講座の開設に際して留意されたのは、閉鎖性を打ち破り、本学の「社会的使命」と「研究・教育の活性化」に資するものでなくてはならないという点であった。そこで本学の教職員が講師を担当し、対話の姿勢をより大切にする講座を「開放セミナー」と名付けることになった。

平成2年9月25日㈫午後5時から真宗総合研究所の会議室において、学長、事務局長、研究所長をはじめ、「大学開放と生涯学習の研究」班の研究員など関係者が集まって「開放セミナー発足式」が行なわれた。

寺川俊昭学長および渡辺貞麿研究所長（当時）の挨拶は次の通りであった。

挨　拶　　**学長　寺川俊昭**

失礼いたします。渡辺先生が、所長にご就任になりましてから、大学にとりましても一つの課題でありましたし、あまり個人色を出してはいけませんけれども、研究所および所長としての渡辺先生にとりましても大きな念願でありました、大学を市民に開放する、こういう願いをもって開く市民講座、あるいは開放講座、これが関係の皆様方の十分のご検討、そして大変なご尽力をいただきまして、具体的に実施の運びにいたりました。来月から開講されることになりましたが、その間の皆様方の大変なご尽力とご苦労に対しまして、改めて厚く御礼申し上げます。

たまたま現在の当局の任期が満了いたしまして、当局全体の交替の時期に入ったことでありますが、現在の当局がその任に就きましたのは、申し上げるまでもなく、一昨年の昭和63年の10月20日でございました。あれからもう二年経つかと、多少の感概がございますけれども、現在の当局が就任して、最初の大学全体をあげて取り組むべき課題といたしましたのは、申し上げるまでもなく、あの差別ビラについての「中間総括」をうけまして、本学において広い意味で人権学習を進めていく、そこの基本方針を策定していくという課題でありました。それに多くの先生方のご参加をえまして、大学は随分努力を集中していったことであります。その中でご存じのように、ああいう極めて遺憾な事件を本学が引き起こした背景をなし、あるいは土壌となっているものを解明していきました。それはいろいろあると思いますけれども、その中で殊に重い意味を持つものとして、研究・教育の体制のなかにも、あるいは事務の執行体制のなかにも見られる、幾重にも錯綜する閉鎖性、こういうものが一番重い問題性としてあると自覚すべきであろうと、こういう見解を提示したことであります。そういう基本方針を終えまして以後、大学はそれに立ちまして、いろんな意味で差別を生む土壌の自覚的克服というだけでなくて、同時に大学をより開かれた、より充実した内容を持つものとすべく、研究・教育を活性化する、そういう課題の基本方針でもある、このように認識したことであります。

それを受けて、この研究所にとりましても、あるいは大学にとりましても、継続する課題であった市民講座。これは今のような課題を自覚的に踏まえて、大学が蓄積したといいましょうか、大学に職を奉じております一人一人が蓄積してきた研究、あるいは現在携わっている研究を、より確かなものにすべく、大学の中のみならず社会にも公開して、我々がやっている研究に、あるいは大谷大学という名があらわす研究に関心をもってくださっている方々、あるいはそれを通して広く仏教、あるいは仏教文化に関心をお持ちの方々に捧げていきたい。そして自らの研究の姿勢あるいはその内実を、よりいいものにしていく、こういう機会としていきたい。これが公開講座の大事な趣旨であろうかと、今までの折々のご検討を拝聴しながら、また改めて思うことであります。

教授会で一、二度申し上げましたように、現在大学というものに対する理解が、かつてとはよほど変わってまいりました。これまでは選抜して入学させた学生を対象に、その研究を教育という形で学生に対して教授していく。これが大学だというのが古典的な、昔ながらの大学理解でありました。しかし現在では、そういうものとは随分変わってまいりまして、やはり社会に奉仕する。大学がその蓄積した研究を学生のみならず、社会の人たちに公開し、提供していく。そういう社会的な役割を大学

は担うべきだと、こういう大学理解に変わりつつございます。

そういうことと、早く曽我量深先生によって「宗門が社会に捧げた大学である」と語られた本学の自己理解、あるいはもっと遡れば、佐々木月樵先生の「仏教を学として学界に公開し、教育を通して国民に普及する」という本学の使命、こういうことを思い出してみましても、あるいはもっと遡って、学祖の清沢先生の、「その信仰を他に伝える」、こういう言葉も思い出してみましても、やはり世に、社会に、あるいは心ある人々に、我々の研究を公開してですね、それからまた我々自身が学びとっていくか、このことが大学の出発の時からの願いであったことも、思い起こすことでございます。

ともあれ、ご下命いただきまして、公開講座最初の講義を、岩田先生と私とで担当させていただきますけれども、この仕事はこれからが本当の仕事でございます。お作りいただきました基礎、これを十分に肝に銘じながら、引き受けました「開放セミナー」の仕事を、お励ましをいただきながら果たしていきたい、こう思うことでございます。

全体として、これまでのご尽力に改めて御礼申し上げますとともに、発足していきますこの公開講座「開放セミナー」が、やはり大谷大学の伝統に少なくとも背いてはならない、あるいはでき得るならば、それを半歩でも一歩でも荘厳するものになれば幸いである、またそうしなければならない、こう思うことでございます。これまでのご努力への御礼、あるいは改めて身に感じられる喜ばしき使命というべきもの、そういうものを感じたまま申し上げまして、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

挨　拶　　**所長**（当時）　**渡辺貞麿**

最初に、皆様方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

正直なところ、「この席でああも言いたい、こうも言いたい。」と、昨日も市内某所で、実は焼き肉かなんぞを女房と食いながら、女房相手にそんなことを考えておったんです。また、言いもしたんですけれども、いざここに出席いたしまして、皆様方のお顔を拝見しているうちに、だんだん気が変わってきました、というよりは、心の有り様が変わってきたんですね。ずうっとお顔を見渡しまして、みんな結局、発足以来の戦友じゃないか、戦友に今更何を言うんだ、一緒に苦労を共にし、しんどいことも共にし、二日続きの会議も共にし、とぼしい酒も一緒に飲み、そういうことばっかりやってきて、今思い起すことといったら、とぼしい酒を最後の一滴まで一緒に分かちあって飲んだというふうな、そんなふうな思い出ばっかり、こう去来するわけです。

むろん、そうですね、学長先生やら、局長さんやらを戦友と申し上げるのは、ちょっとどうかと思いますけれども、やはりこれまた戦友なんですね、苦しい戦いを共にしてここまでやってきたという。ですから、やはり今更何をどうのこうのあらたまってしかつめらしいようなことを申し上げることはない。

ただ思いますことは、これは私自身の思いです。外に本学の学問を開く、学問研究を開く、それは同時に、「我を問うことだ」、「自分自身の学問を問うことだ」、そしてそれが、大谷大学の学問研究の活性化につながる。我々がたどりついたこの結論は、大谷大学そのものの問題でなければならないと同時に、私自身の問題でもあると思っております。この公開講座、それが僕自身の学問研究の活性化につながると思います。そうでなきゃならんと思っています。そんな意味で、私、この公開講座の、開放セミナーのこれから先について、限りなくいろんな夢をふくらますことができます。これが、この開放セミナーが二十一世紀に果たしてどんな成長を遂げているか、そしてまた、それを言わば震源地にして、この大谷大学の学問研究がどんなふうな成長を遂げているか、僕はもう今からそれを楽しみにしたいと思っています。むろん僕は、それまで長生きをするつもりですし、そしてまた、僕自身もそういうこの開放セミナーの賦活力に促されて、「わしゃ、もうろくした。」なんてことは絶対に言いたくないと、そのように思っています。

幸か不幸か、まさに幸か不幸かと申し上げます。今月いっぱいで所長の任を退きます。しかしながら、このプロジェクトに対して、あるいは開放セミナーに対して、物心両面のとでかいことを申し上げたいんですが、「物」の方はどうもこう荷がかちすぎますので、「心」の方でおおいにご支援もうしあげたい、全面的にご協力もうしあげたい、そのように思っております。ありがとうございました。本当にありがとうございました。

セミナーは、土曜日は午後２時から、木曜日は午後６時30分から開講し、休憩や質疑の時間を含めて２時間行われた。

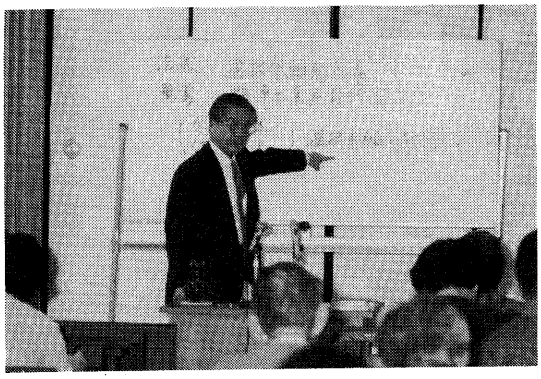
最初の開放セミナーは尋源講堂で開催したが、その後はいずれも９月に竣工したばかりの１号館1410教室を会場にして行われた。この教室は１号館の最上階であり外界の騒音を避け、また学生の課外活動とも抵触しないよう考慮して決定されたものである。

真新しい教室で和気藹々のうちにセミナーが進行し、最終日には参加者に「修了証」をお渡しした。開放セミナーへの参加は両セミナー合わせて七十余名であった。高齢化社会を反映して最高齢の八十七歳の女性や八十四

歳の男性から十七歳の高校生にいたるまで実に多彩な方々にご参加いただいた。

寺川俊昭学長の「親鸞の世界―『教行信証』―」と岩田慶治教授の「文化人類学から見た自然、『風景』、宗教」の概要および日程とテーマは次の通りであった。

親鸞の世界　―『教行信証』―



概　要

12世紀末から13世紀のはじめごろ、これは日本の時代区分でいえば、平安末期から鎌倉初期にあたります。この時期は、日本にとっては大きな変動の時代でした。すなわち古代日本の国家体制であった律令制がくずれていき、武家の力を中心として中世の封建社会が形成されはじめる、歴史的な変動の時代でありました。

この歴史的状況を、末法濁世ととらえた法然は、そこに人間の危機をみたのです。この危機の中で苦しんだ法然は、その長い求道の悪戦苦闘をへて、ついに選択本願の念仏に出おうたのでした。そしてこの念仏を、濁世にあえぐ人びとに、力を尽くして棒げていったのです。

この法然に、千載一遇というべき出あいをとげた親鸞は、大らかに無碍光如来の名を称えて生きる念仏者に、自分自身をきたえていきました。そして念仏する仏者としての自分の体験と思索をとおして、選択本願の念仏こそが、人間にとっての根源的真理であることを、渾身の力をこめてあきらかにしていきました。『教行信証』はその記録であり、日本における大乗仏教をあきらかにした思想書の、最高峰の一つです。

回	月　日（曜日）	テーマ
1	１０月２０日㈯	『教行信証』の志願
2	１１月１０日㈯	真実の言葉との出遇い
3	１１月２２日㈭	大いなる無量寿経
4	１２月　６日㈭	救いを求めるもの
5	１２月１３日㈭	如来の回向

文化人類学から見た自然、「風景」、宗教

概　要

日本・東南アジア・インド各地における野外調査のなかで気づいたこと、考えたことを素材としながら、自然と宗教のかかわりを風景として描いてみたい。風景において自然と宗教を支えるものを考えたいのである。只今の構図としては、(1)神秘経験　(2)遊び　(3)風景　となる筈であるが、どういう方向に展開していくやら、自分でもわからない。皆さまとともに考えたいのである。

とにかく、神秘経験という出会いを通じて諸民族における宗教の発端を考え、遊びという行為のなかで言葉によらない自然と人間との対話・交流・ゆらぎをとらえ、風景あるいは風景画をよりどころとして人間の自己形成をとらえる。風景によって自画像を描く―それが誰の自画像かよくわからないが―。そういう試み、そういう冒険をしてみたいのである。

回	月　日（曜日）	テーマ
1	１０月２７日㈯	神　秘　経　験
2	１１月１７日㈯	遊　　び
3	１２月　１日㈯	風　　景

『真宗学事研究』研究会報告
日時：1989年12月14日
場所：博綜館第2会議室

〈指定研究〉

大谷大学三百年史に向けて

――近代における大学再形成――

学長　寺川俊昭

＜1＞

「大谷大学三百年史の基礎的研究」という課題をもったこの研究班で、平素皆様方がそれぞれの分野での研究をお進めいただいておりますことに、この場で改めてお礼を申し上げます。井上円さんからご依頼のありました時に、こういうスタイルでという手本としていただきましたのが、4年ほど前に、広瀬杲先生が「大谷大学三百年史に向けて」という題でお話しなさったものの一部の記録でした。それからその翌年の北西弘先生の「大谷大学三百年史を考える」、これはお書きになった文章でしょうか。これを依るべき手本として頂きましたので、成程こういうことをいえばいいのかと思いました。最初11月30日に予定をしておりましたのが、都合で今日まで延びまして、大変ご迷惑をおかけいたしました。実はさっき、広報課で出しました『大谷大学三百二十年史の語るもの』を読んだのが2時頃からでして、それから考え始めた状態ですので、準備が全然ありません。それで頭の中にあるものを断片的に申し上げまして、お許しいただきたいのです。それでもし今日の会の性格づけをするならば、「大谷大学三百二十年史をめぐっての楽しき雑談会」ぐらいのところで、お許しいただければ大変有難く存じます。

実は今年が龍谷大学が創立されて350年を迎えるというので、米国を代表する大学であるあのハーバード大学、これがほぼ350年の歴史をもつ大学のようですので、それとある種の連携といいましょうか、呼応の関係を結びながら、龍大創立350年を祝すという、記念の行事を展開なさっていることは、ご存知の通りです。ところで先日、『文化時報』という宗教新聞の記者が取材に見えまして、こういわれるのです。龍大と谷大とは誰が見ても性格の非常に近い大学であり、その大学としての歩みも、非常に近いと理解している。そして京都だけでなく、日本の仏教系の大学の中で双璧というべき大学であると思うが、ほとんど同じような長い歴史をもつ大谷大学という立場で、350年の歴史を経られた龍谷大学をどのように見られるか。こういうことを新聞記者が尋ねてこられて聞かれるのです。「一体谷大と龍大はどこが違うのですか」、と。どこが違うといったって、それはまあ単科大学と総合大学と形が違います。こういうようなことをいっておったのですが、私の所へ来られる直前に、龍大の信楽峻麿先生の所へお訪ねになりまして、龍大の立場でこの350年という長い歴史をもつ大学をどう考えるかということについて、学長としての感想めいたお考えをお聞きしてこられたそうです。それに対して信楽先生がおっしゃった中に、

「大谷大学は清沢満之先生を学祖とするとおっしゃっているようだが、私達龍大は親鸞聖人を学祖とする大学である。」

ということを語られたということでした。記者はそれを伝えて、このお考えをまずどう考えられますかと問われたのが、インタビューの最初でした。私はそれをお聞きして、なかなか面白いご見解だと思いましたが、私達は親鸞聖人を学祖とは思わないのだ。親鸞は宗祖であって、大学の学祖という位置にある人とは思わない。親鸞という人は大学の開祖ではなくて、人類の真実道を開いた人であり、日本民族の中ですけれども、民族の枠を超えるような意味と広さをもつ人でありまして、一大学の学祖とは考えない。こういうことをいうておったことです。

そのように私達は初代学監清沢満之を学祖と位置づけるのです。ところが350年の歴史ということを考えておりまして、前後錯綜いたしますけれども、龍大は350年の歴史というものが、ある実質、意味をもった実質のあることとして語られているようです。綿々350年の歴史をもつ大学であると。それと同じように、大谷大学は30年ほど遅れておりますけれども、綿々320年の歴史をもつ大学である、こういうことが充分の実質をもっていい得るであろうか。あるいはちょっと違うのではないか。こういう実感が、私には以前からあるのです。

320年史といったら、学祖は恵空講師でしょう。初代講師を勤められた恵空師をもって、学寮の出発とするのですから、学祖は恵空講師かということになりましょう。ところがそういわないで、学祖はやはり清沢先生だといいます。このことは何を意味するのか。親鸞聖人でもなく、恵空講師でもなく、90年ほど前に初代学監を勤められた清沢満之先生をもって学祖とするのです。その時、どうも「三百二十年史」という言葉に、そういう意味で多少の違和感を感じておりました。もっとも、だからといって明治34年から、1901年から今まで90年の歴史ということを強調する気持ちもないのです。しかもその90年の歴史がまた非常に複雑でして、決して清沢満之の名と共にある一つの大学の精神が、輝きを放ちながら継承されてきたわけでもなく、いろんな方が指摘されておりますように、紆余曲折を経ている。こういった実感がありますので、一体この三百二十年史というものがどういう意味をもつのか、これがはや一つの問題ではないか。こういう感がしてなりません。これもまた、いろいろお教えをいただきたいことです。

私は何年か龍大へ出講をいたしまして、真宗学専攻の学生さんと話をする機会がしばしばありました。そのような折に感じますこととして、龍大の真宗学では、江戸期に形成せられた学風が、殊に真宗研究の伝統の場では、ある意味でずっと継承されていて、あまり断絶がないのではないかということがあるのです。その証拠に、龍大の先生方がしばしば共通におっしゃるのは、真宗あるいは真宗教学の近代化、こういう言葉です。封建時代に形成せられた教学を、現代の言葉にどのように翻訳していくか。表現を変えていくか。そこらに非常に苦心せられる課題があり、その把握の形があるように、しばしばお聞きします。我々も江戸期に形成せられた宗学をもっている大学の伝統ですけれども、それを近代化するという課題で、この大学で真宗学を考えるということは、あまりありませんですね。一つの伝統が連綿として伝承されているというよりも、何かこう断絶が、320年の歴史の中のあちらこちらにあるのでありまして、そこに谷大の個性というていいものがある。こういう実感が強いのです。それで学事史研究で、この320年というものが、実質をもった言葉として語り得るかという検討があったかどうかは知りませんが、真宗学を学んでいる者の一人としてもつ実感は、そういうことであります。

＜2＞

明治の30年代に、つまり19世紀が終わろうとする頃の、先生方もよくご存知のような状況、あるいは経緯の中で、清沢満之先生が東京の地に大学を移し、真宗大学という名の一つの「大学」であろうとして、その歩みを始めているわけです。その時に、清沢先生はどういうことを考えていたのだろうかと想像してみますと、先生の胸の中に去来する、いくつかの思いがあったのであろうと思います。清沢満之という人の歴史的意義と申しましょうか、あの人が果たした仕事の意味をどう捉えるかということについては、もちろんさまざまな理解が可能でしょうが、私は明治の状況の中における明治仏教の復興、仏教再興、これを願いとして立った志士だと思います。国家的な場で、江戸幕府を倒して新政府をうち建て、新しい国民国家を形成していくという抱負をもった人達が輩出したのは、もう少し前でした。玉石混交とでもいいましょうか、いろんな連中が集まってその仕事を果たしたのは、清沢先生の大学形成に先立つ4、50年ほど前でしょうが、こと仏教復興という課題を意味あるものとして見た時には、清沢満之は、志士という言葉がふさわしいような生涯であった。こういう感が強いのです。その清沢先生の、一種の気概をもった気風、人間性といっていいでしょうか、それを培ったのは、やはり江戸期に形成せられ継承されていった武士気質（かたぎ）だと思います。つまり人生を戦いの場と覚悟して生きていた江戸の武士という階層のもつ文化なり人間性、あるいはエートスといいましょうか、気風ですね。その上質な部分が、清沢満之に確かに受け継がれています。武士の上質の気概をもった僧侶でしょう、清沢先生は。そういう点からも、私は志士という言葉が、清沢先生の人柄を表すのにいい言葉だと、密かに思っているのです。

その清沢先生が、仏教復興を真宗の一僧侶としての志願として、さまざまな行動に出ていかれますけれども、その仏教復興の志願を、真宗大谷派に属する一人の僧侶として自分自身に課した時に、あのよくご存知の制欲自戒の生活、こう理解されております禁欲主義の色濃い、奇妙な生活が実験されました。同じように、一人の僧侶として身を置き、そしてそこに非常に大きな社会的な、もしくは歴史的な使命を見た、あるいは見ようとした真宗大谷派という宗門に即して仏教復興の志願を行じた時に、あの明治29年から31年にわたって展開した「大谷派寺務革新運動」、普通「白河党宗門改革運動」と呼ばれている宗門の改革運動が展開されていったのだと思います。それで私は、真宗大学の東京移転というのは、その白河党の「大谷派寺務革新運動」ですね、この辺りから胚胎しているように思えるのです。

あの運動をどう理解するかということについても、いろいろの見解がありますけれども、私は清沢先生の非常に純潔な求道心に生きた真宗の僧侶としての思いからすると、改革運動は寺務革新すなわち今でいったら宗政改革ということですから、あの運動そのものはきわめて政治的な色彩の濃い運動として展開します。そしてそのような政治的な色彩の濃い運動の要求し、実現しようとしたものは、宗門内議会政治の要求であったと了解すべきものなのです。これもご存知の通りです。ところが当時

の大谷派の宗門状況の中で、この宗門内議会政治を要求するということは、今も申し上げたように、清沢先生は宗政家ではなくて、一個の純潔な求道者ですから、そういう清沢先生の自覚した立場を考えてみれば、宗門内議会政治、つまり当時のいわゆる門末が自らの宗門の運営に責任をもって参加する、こういったことができる体制を造りたい、こういう要求なのですけれども、その行為のもつ宗教的な意味を考えてみなければならないと思うのです。我々は昭和37年以来の同朋会運動の展開後におりますから、その視点から見ますと、「同朋の教団」を回復したい、こういう切実な願いをもつ行為であったと理解すべきだと、私は思うております。形は宗政改革運動ですけれども、あるいは宗門の体制の変革要求ですけれども、単に政治的な次元の要求にとどまるものではなくて、今いった「同朋の教団」というべきもの、つまり親鸞の精神に応え、そしてその親鸞の精神を世に伝える、こういう責任をもつ宗門としてその生命を新たにしたい。宗門はそういうものでなければならない。こういう宗教的意味を、清沢先生は恐らく感じていたにちがいないと、こう理解します。

ところがですね、その宗門内議会政治を要求して法主に誓願書を提出し、それが受理せられて改革が一つの節目を迎えていきました後、真宗大学の責任者に、占部観順師が就任します。この占部観順師については、畑辺初代さんが多分研究発表をされたと思いますが、その占部観順が清沢一派の改革派の支持を受けて、真宗大学の学監に就任することをめぐってですね、占部排斥運動というのが起きたはずです。その時に占部観順師は異安心の疑いがある、こういう批判を浴びたのです。詳しくは知りませんが、「タノム・タスケタマエ」は請求か信順か、そういう議論ではなかったでしょうか。『御文』が、真宗の安心を表す基本語の一つとして、「我ラノ後生ヲタスケタマエ」、と「弥陀ヲタノム」、と申します。『歎異抄』にもこの言葉が出ますから『歎異抄』にも由来するのでしょうし、蓮如が大事にした『安心決定鈔』からも由来しているかもしれませんが、こういう江戸時代を通してずっと真宗の安心を表す基本語と理解されていた「タノム・タスケタマエ」。これは人間が如来に対して、請求、つまり助けて下さいとお願いする請求なのか、それとも助けるぞという弥陀の仰せに信順するのだという意味での、信順を表す言葉なのか、どちらが正意であるかという議論です。学寮側は請求説で、観順師は信順説でしたでしょうか。こういうことが、真宗安心の根本に関わる問題として取り上げられまして、占部氏の恐らく信順の立場に立った真宗理解が異解である、異安心の疑いがあるとされ、そして学監罷免になります。それで観順師は非常に立腹して、遂に興正派に転派したと記憶しています。

こういうようなことが改革運動の後で起こりましたが、これは表面は大学の学監への批判ですけれども、実はそれを裏で支えていると目された、清沢一派に対する批判なのです。のみならず、あの大谷派寺務革新運動の中で、当時学寮におられたほとんどの学僧達は、反清沢にまわりました。清沢先生の見解に批判的立場をとって、分かりやすく単純化していえば、ほとんどの学僧たちは法主派の立場に立ったのです。それで貫練会、『大経』の言葉であるあの、「貫練群籍」から命名した貫練会という学僧の集まりをつくってですね、一派の、つまり大谷派の正意の安心を、命をかけて護るというようなことを叫んでいったのです。これは実は清沢満之先生その人の真宗理解に対して、非常に胡散臭い、異解的なものを感じていたのでしょうが、清沢先生を矢面に立てられませんので、占部師を矢面に立てた感が強くいたします。そういうことがありまして、清沢先生はこれをきわめて遺憾に思いまして、一体貫練会とは何ぞやというので、当時改革派がご存知の通り『教界時言』という機関紙を出しておりましたが、その中に有名な「貫練会を論ず」というかなり長い論文を書きます。

この中で、これはご覧いただいてご承知のことと思いますけれども、要点は宗義と宗学は違う、ということだったと思います。宗義、真宗の根本義というのは、『教行信証』の中に明らかに顕揚されている通りである。しかし宗学は、これは末学の了解であって、末学というのは現在の学徒達という意味ですが、宗祖から遠く隔たった時代に生きている学徒達ですから、宗義は『教行信証』に炳乎として明らかであるけれども、しかし宗学は末学の宗義に対する了解なのだから、これは人により時代により、さまざまに変容していく。そして宗学が願いとするのは、宗義に表される浄土真宗という仏道の、いわば真理性を開顕していくことだといえましょうが、これは末学の研究であり、了解であり、学解なのだから、相対的なものである。従って香月院師の偉大さをもってしても、あれを絶対というわけにはいかない。こういうことを主張したのです。

それから同時に、宗学は学ぶ一人ひとりの真宗の根本義についての学解であり、研究であり、探究であり、了解なのだから、それは自由でなければならないというので、自由討議、つまり真宗研究の自由、これを非常に強い調子で主張しております。そういう自由、つまり学の自由ですね、こういうところに立てば、いわゆる宗学はこれはもう自由な討議・研究を許さない、きわめて強い教権の統制下にあるといわざるを得ない。その教権の中心に法主がいるわけですから、清沢先生は法主制に対して非常に厳しい批判をいたします。清沢先生は明治人ですし、武士気質の人でありますから、法主に親密さと敬意を表しますけれども、制度としての法主制については、真向から批判します。そういうことと、法主の権威の下にある宗学に対する批判です。その宗学が、同朋の宗門、

同朋精神に立つ教団、つまり宗祖の精神に適う、とまではいわなくとも、少なくとも背いてはならないという願いを掲げて提起した改革運動に、何故宗学者達は反動的な批判者となるのか。こういう憤りがあるわけです。のみならず、宗学が行っているのは一体何であるか。重箱の隅を楊枝でつついているような細かい議論ばかりではないか。明治の30年代にすでに展開している、当時非常な魅力をもって学び始められていた西欧の諸学、そんなものにとても太刀打ちできない。にもかかわらず、タノムがどうだ、タスケタマエがどうだという議論ばかりやっていて、反動そのものではないか。まあ率直にいえばそれを訴えたのが、「貫練会を論ず」という論文です。私はこの「貫練会を論ず」という論文で、清沢先生は宗学に対して、ある意味での批判的訣別を行ったと理解できるのだろうと、思っているのです。

＜3＞

そのことがありまして、やがて改革運動が幕を閉じたのが明治31年ですが、先生は運動の責任を問われて僧籍剝奪を受けます。しかしやがてまた復帰するのですが、その理由は、教学振興ですね。その教学振興の形として、清沢先生が真宗大学を京都から東京へ移すという具体的な形で、それを背負っていくわけです。そのことがありますので、清沢先生が東京の真宗大学について構想した大学のあり方、及び学の構成を考えてみますと、宗学に対しては訣別するという意味を秘めていると思います。それで今のわれわれの課題である大学の三百二十年史というものが、どれほどの連続性、そして実質をもっていい得るかということが、私にとってはすこぶる問題的なのです。東京に真宗大学を開いた、その授業編成なども改めて見るべきでしょうが、あれは哲・史・文ですか、大枠は。この哲学・史学・文学というのは、多分当時の文科大学の基本型でしょう。それで、あまり楽しくない雑談で済みませんが、明治34年というと清沢先生が39歳の時です。その時に、私はどうもこういう感じがしてならないのですが、実はここにたまたま学士会の100年の記念号がありますが、これを見ておりましたら、この写真なのですけども、ご存知の通り小石川に植物園がありますね。これはもちろん農学部の実習園でした。江戸時代には幕府の薬草園だったところです。明治10年頃、東大が初めは開成学校として発足し、それに工科大学やら医科大学やらバラバラにあったのを一つの大学にまとめて東京大学となった時の総長が、加藤弘之氏です。その加藤弘之氏が退任した後、この加藤氏を中心にして学士会というものが作られてまいります。その時に小石川に集まって、学士会発足を相談した記念写真なのですが、たまたまこれを見ておりましたら、南条文雄先生と徳永満之先生が写っているのです。清沢先生は本当に田舎の貧相な青年という感じですが、南条さんは田舎のご住職という感じです。しかし、私たちの大学にとって、初代・二代の学監を勤めてくださった一番大事な方が、学士会結成の集まりに、東大の若いO・Bとして出席なさっている。たまたまこの写真が見つかりまして、成程と思うことがありました。

私は、京都で長い歴史をもつ学寮を、少し整理して東京で再出発する、こういう形ではなくて、むしろ大学というに値するような、新しい大学を構想したと考えるべきではないかと思うのです。清沢先生がその青年期につけた号は、ご存知の通り建峯でしょう。真宗大学開学の時は、もう先生は臘扇と名のっていましたか。建峯というのは、名古屋から東京へ東海道線に乗って行く時に、富士山を仰ぎ見るでしょう。その車窓から富士山を仰ぎ見ながらですね、青年時代の清沢先生がある気概に満ちた理想、もしくは夢を懐いた。それをよく表す号です。富士山のような高峰を建立したい、こういう意味でしょうか。そういうものが、清沢という一個の学徒に、非常に大事なものとして甦るというよりも、ずっと憶念相続されていたのではないか、それを思うのです。つまり、高倉大学寮の再現ではなくて、自らがその青年期を送った、日本で本格的な大学としてただ一つであった東大の文学部、あるいは文科大学。それをやはりモデルとして、新しく再出発する真宗大学はありたい。こういう夢というか理想を、あの時に構想なさったのではなかろうかと考えた方が、どうも分かり易いという気がします。

そうすると、実は清沢先生の真宗大学開学の頃に、日本の私立大学が幾つか開学されているのです。日本の私立大学で、明治以降で最も古いのは、慶応義塾なのです。これは名のとおり慶応年間の開設かと思いますが、実は安政5年、1858年に、ご存知のような経緯の中で福沢諭吉氏が開いた塾です。学塾というべきでしょうか。それが明治23年に大学部を開設して、今の慶応義塾大学、こういう名称で呼ばれるものになるのです。だから、やはり日本の私立大学の中では、宗門系の、江戸期以来の長い歴史をもつそれは別として、そうでないのは慶応義塾が一番古いのです。更にあれは森有礼氏の懐刀だった人ですか、新島襄氏は。このごろ司馬遼太郎氏が、『明治という国家』という非常にノスタルジックな関心に満ちた本を著しているでしょう。今それが、「太郎の国の物語」として、テレビで放映されております。その本の中に、この新島襄先生のことが、大変面白く描写されております。何かその、大変よく出来た人なのだそうですね。裸一貫でアメリカへ行き、食うや食わずで苦学をしていたところに、森有礼氏でしたか、日本の明治国家を形成するという課題を背負った大官が行きまして、新島先生に会い、非常に感動して、すぐ国費留学生にしたのでしたかね。そして自分の協力者とするのです。そういう新島襄先生が、その後京都に同志社を開くのが、明治8年で

す。

日本私立大学連盟が出版した『建学の精神』では、その同志社の建学の精神は、

第一が、「キリスト教主義を徳育の基本とする」、

第二が、「良心の全身に充満したる人物の養成」、

そして第三が、「自治、自立、自由の精神に生きる人々を社会に送り出す」、

第四として、「一国を維持するは、決して二、三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教養あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず。是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり。而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す」

と、こういうのが新島先生が掲げた同志社建学の精神です。清沢先生の真宗大学の開設は、これに対応しかつ対抗しなければならないわけです。それで清沢先生の「開学の辞」にいわれている、「本学は他の学校と異なりまして、宗教学校なること」という言葉がありますでしょう、「即ち我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして」と。ああいうのは当然、例えばこの新島先生の同志社設立の精神、これを熟知しておられての発言と了解しておくべきではないでしょうか。

慶応の建学の精神を見ますと、「創立者」とありますから、諭吉さんのことですね、

「創立者である福沢の人格、思想および教学の理念が（中略）大きなバックボーンとなっている。」

これは新しく作られた文章でしょうか。第二に、

「国公立の大学のそれとは違った（中略）私立の学塾としての立場を貫き（中略）、すぐれた人材を主として在野に送り出す」、

慶応はやはり在野主義ですね。更にこれは「大谷大学三百二十年史」に、安富信哉先生がお書きになっているところに詳しく述べておられますから、ご覧いただければすぐ分かりますが、明治15年に東京専門学校として創立された早稲田大学があります。その建学の精神は「学の独立」です。これはまあ、早稲田の校歌にある通りです。

「明治初期の外国語による高等教育が暗黙裡に国民の他国民への隷属、日本の他国への従属ということにつながるものと考え、日本語による専門教育を意識的・自覚的に強調するものであった。したがって、この理念は、必然的に学問を政治から独立せしめ、学問本来のあり方を追求するという思想に結びつく。「進取の精神」、（中略）反権力的・反権威的風土は、学問的に進取の精神を培うための重要な契機となった、（中略）既成の権威との衝突（こそが）、学問本来のあり方である。」

大隈さんらしい言葉ですね。

こういう、「学の独立」・「在野の精神」こういったものを掲げて、その後日本の代表的な私立大学となっていく幾つかの大学が、明治の10年代から30年代にかけて設立されていきます。明治37年には日本大学と明治大学、明治38年には中央大学、こういう大学です。それぞれ個性をもって。殊に福沢諭吉先生のあの「在野の精神」、早稲田の大隈氏の「学の独立」、これはきわめて意味ある私学の建学の精神でしょう。さらに同志社の「良心の全身に充満したる」人物を養成したい、これも非常に立派な建学の精神です。こういうものに呼応し、もしくは対抗するのでしょう、清沢先生の真宗大学は。当時、日本最大の教化団体は真宗教団ですから、東西両本願寺の設立にかかる大学として、やはり日本の、あるいは国民の教育、教化という点では、非常に大きな責任がある。こういう自負が当時の真宗にはあるのですから、その設立にかかる大学が、新しく形成せられていった今名前をあげたような、しかしながら非常に優れた建学の精神をもつ諸大学に伍して、同時にそれと対抗してですね、引けを取ってはならないという一種の覇気が、清沢先生にあったと考えても不自然ではないと思います。私はそういう関心で、あの短い「開校の辞」を読みたいと思っていることです。

当然その時、大学がどういう構成をもつべきかを考えた時、やはり自分が経験した東大の文学部ですね、これを一つの基本的なモデルとしながら、真宗大学の学科編成等を恐らく構想したのではないかと思うのです。資料がありませんので想像だけですけれども、そういう思いがいたします。こういうことを申しますのは、大谷大学は「他の学校と異なりまして」、という特殊性を過度に強調するのはあまりよくないと思うからです。やがて日本の私立大学を代表するようになる優れた諸私立大学が形成せられていくその大きな流れの中に、真宗大学の形成も、東京における形成もあったというべきでしょう。恐らく共通する志願が、つまり教育の理念等の志願があるのでしょう。しかし真宗大学の独自の願いをいえば、「我々が信奉する本願他力の宗義に基づいて」、こういう宗教学校である。つまり宗教という、人間にとって最も基本的な要求、ここに立ってそれを自覚化し、そういう宗教的精神に満ちた人物を養成したい、こういう志願をもって真宗大学は開学されたのです。

＜4＞

宗教的精神というものは、しかしながら課題的な精神です。前述のような高邁な気概と期待をもって、積極的な宗教的精神に立つ浄土真宗の学場であろうとして開設された真宗大学は、それを十分に理解できなかった学生のストライキによって、一つの躓きを経験します。そして学祖清沢先生その人も、大学を辞し、１年を経ずして文字通り命終えていきました。そして、教団の事情によって、開学10年にして真宗大学は京都へ帰ります。そして

現在のこの地に、大正の初期に真宗大谷大学という名称のもとに、再発足することとなりました。その新しく再発足する形をとった真宗大谷大学については、この研究会で櫻部建先生のお話があったことです。そしてこれでも言及なさっておりますが、中心となっている仏教研究のところは、宗学者がほとんど全部を占めておられます。つまり、ある意味で旧態に戻ろうとしたわけです。ところがその中で、南条文雄先生が二代目の学監、当時では学長に就任されます。その南条文雄先生によりまして、大谷大学が最も大事な学の営為とする仏教の研究が、ご存知のようなサンスクリットによる、そしてそれと共にパーリ語及びチベット語の文献による、つまり漢訳されたテキストだけではなくて、安富先生にお聞きしたら、竪のものを横にするのだそうですが、横に書いてあるテキストによる仏教研究が、しかも近代の学というスタイルで、大谷大学を背負った南条先生のもとで展開していきます。更にその後、佐々木月樵先生が、これは繰り返していわれるように、ヨーロッパの古い伝統をもつ大学を見学されまして、そこに非常に大きな示唆を受けられて、「樹立の精神」に発表せられた、あの大学のあり方が構想されていきます。こういう歩みが、大正年間にずっと継続いたします。その南条先生の、文学博士第１号といわれた南条先生の、あの真宗の学僧としてのいわば良心とあの広い学識が、これは真宗大谷大学に託された期待なのか、南条文雄先生に対して寄せられた期待なのか分かりませんけれども、渾然一体となって、何か非常にいい学風が形成されていった感が強くいたします。その素地の中で、佐々木月樵先生が鈴木大拙先生を学習院からお迎えになります。そして京都大学の哲学と非常に深い連関をもって、真宗大谷大学の内容づけに努力なさっていったわけです。人でいえば大拙先生をはじめ、曽我量深、金子大栄、こういう尊敬すべき先輩方が参加して、大谷大学の内容づけを大きな責任をもってなさっていったということです。

ところが、やがて大正の末年に、龍大の真宗学研究所であったと思いますが、そこでの公開講義がありまして、金子先生がご存知の通り、「浄土の観念」を講義なさいまして、やがてそれが出版されました。それが物議を醸してですね、いわゆる「金子異安心事件」と理解されている事件が起きました。月樵先生は真宗とは「真実をこれ宗とする仏教である」、このような了解をおもちでしたが、従来宗乗と呼ばれていたものが真宗学、余乗が仏教学、かつて宗乗・余乗だったのが、真宗学・仏教学として対々である、こういった形になりますね。こういう形をとりながら、佐々木先生の大学構想が展開し、清沢先生の「浄土真宗の学場」という精神は継承されていったでしょうが、それが金子異安心事件によってつまずいたといわざるを得ない事態になりました。私は詳しくは知りませんが、教授の連袂辞職と全学生の退学という混乱した形になっておりますし、その中で金子先生は昭和３年に大谷大学の教授の職を追われましたが、同時に僧籍剝奪にもなっております。

ところがそれと同じように、やはり龍大で話されたのだったと思いますが、曽我先生の「如来表現の範疇としての三心観」、これも異端の臭いの強い真宗理解だ、こういう嫌疑がかけられます。あれもどうもおかしい。願心の因相だとか、自相だとか、果相だとかといって、どうも正意のご安心と違うように思われる。けれども曽我先生のこの論文を取り上げて、問題点を指摘して異安心だと断定するにしては、どこがどう異安心であるかは、当時の学僧達というかご講者達では、誰もできなかったといわれています。要するに、よく分からなかったのでしょう。それで金子先生の「浄土の観念」は、「観念の浄土」といい直したりしながら、金子先生は実在の浄土を否定するのか、こんな批判を浴びせられます。しかしあの「如来表現の範疇としての三心観」は、どうも難しくてよく分からない。あれを論破して、ここが異解だと断定できるような力量をもったご講者は、どうもおらないですし、さりとてあれでいいというわけにもいかない。金子先生の辞職という本山の措置を憤って学生がストライキをしますが、その中心となったのは松原祐善先生であったということです。当時の松原先生は、演説の名手と呼ばれていたのだそうですが、それと一緒になって訓覇信雄先生などが、藤島達朗先生などの協力もいただかれながら、金子先生への措置を不当だとする運動を、一所懸命なさったそうです。その問題児の松原祐善、訓覇信雄、こういう人たちが昭和５年の３月に卒業されました。その卒業式の晩に、当時本山の教学部長であった下間空教氏が曽我先生のお宅へ訪ねていって、「先生、どうしても辞めてもらわんといけません。」こういわれたのだそうです。それを受けた曽我先生は、「ああ、そうでございますか。」といって辞めてしまわれたというのです。それで、曽我先生は異安心であると断定されているのではないのです。教学部長の要請を受けられて、辞表を提出なさった。こういう多少滑稽な、いかにも二昔（フタ）前の真宗僧侶らしい気風ですね。

ずっと前に、松原先生たちの学位授与の祝賀会がありました時、その席にもう故人となられましたが、当時宗務総長であり理事長であった星谷慶縁氏が来られまして、理事長としてご挨拶をなさいました。そのあと松原先生が学位を受けられたお三人を代表して、謝辞をお述べになったのです。ところが松原先生は、ふと見ると目の前に星谷宗務総長がおられるものですから、昔なじみでよくご存知の間柄ですが、金子先生のことを思い出されまして、謝辞の途中で、「一体、本山はなんですか」、といい出されました。星谷さんは、「何ですかとは何ですか」という顔をなさいましたが、何をいわれるのかと思って聞いておりましたら、本山は金子先生を追放して

おきながら、やがて金子先生たちは昭和16年でしたかに復帰なさいますけども、一言も「すまなかった」というたことがない。「何たる冷たい本山であるか」というてですね、宗務総長に向けて、きわめて率直な宗門に対する感情を吐露なさっておりました。成程と、松原先生が金子先生追放事件のストライキの中心人物だったのですから、大変に面白い感じでございました。そういうのは、私立大学の面白さではないでしょうか。

このようにして金子・曽我先生が大学を去られましたあと、しかし曽我・金子先生の講義を是非聴きたいというので、ご存知の通りあの興法学園が鹿ヶ谷に開かれます。そこで出された雑誌は『仏座』ですが、歴史に残った一つのお仕事である、金子先生の『教行信証講読』は、この雑誌に連載されたものです。

＜5＞

こうして、金子先生及び曽我先生は大学を去って行かれました。そして連袂辞職せられた教授達も、やがて復帰せられていったのですが、その頃から、清沢・南条・佐々木、この初期三代の学長が言葉にし、あるいはしなくともですね、やはり近代の大学、こういうものとして、広くいえば仏教の、核心となるのは真宗の、あるいはその歴史の研究の場であろうとする、こういう大学のあり方に対して、やはり宗学の系譜にむしろ直接している真宗の、あるいは仏教の学的研究が復活してきているように思います。昭和の初期からそれがずっと続いてきたのでありまして、私が京都へ来たのは昭和27年なのですが、その年はたまたま清沢満之先生の50回忌の年でした。当時、山田亮賢先生が中心となられまして、清沢先生の50回忌を大谷大学で行いたい、こう強く希望されましたのですが、当時の大谷大学は、大学で清沢満之先生の50回忌を勤めることを了承しなかったと聞きました。それで岡崎別院で50回忌の法要を営まれたのですが、お集まりになった浩々洞の系譜をひく関係の方々に、大谷大学に対しての不満があったように記憶しております。

ですから、本学は清沢先生を学祖といたしますけれども、清沢先生の後、その大学に託した願いが、その通り継承されてきたとは必ずしもいえないのではないかと思うのです。昭和３年の金子異安心事件の時に、頓挫している。そして清沢という名さえ、大谷大学のみならず宗門もですが、宗門・大学のどちらもが清沢先生を敬して遠ざける、いやそれ以上に、批判的に見る状態が続いていたと思います。宗門が清沢先生の名誉回復をしたのは、あのご遠忌の直前の、宮谷法含総長による『宗門白書』なのですが、大学においても、やはり大谷大学の独自性ということを真剣に考えるならば、清沢満之の「建学の精神」から、大学を自覚的に見ていく歩みを始めなければならない。こういうことを強くおっしゃったのは、曽我先生が学長に就任されてからのように思います。ですから最近の十数年のことです。これはまず否めない流れではないでしょうか。そういう意味で、私はこの大谷大学の300年の歴史といいますけども、最初に素朴な感想として申し上げましたように、幾多の曲折を経ております。非常に苦渋に満ちた遍歴があり、いま申したようないろいろの場面で傷つきながら歩んできている、こういうことを思うことです。

しかし、やはり大学としての初心である1901年の真宗大学開設の時、思い起こしてみますと、仏教を主体的に学び、その真理性を開顕していくという願いを真宗大学はもつのですが、その仏教の真理性を開顕していく努力を、学という形で行い、あるいは展開していこうとする時に、やはり当時日本で唯一の大学であった東京大学の文学部、例えばそういうような形で形成せられた大学をモデルにすべきだ。こういう課題が清沢先生にあったのではないかということを、私達は改めて思い起こしてよいのではないか、という気がいたします。つまり、その後東京大学では、仏教研究がご存知の通り、原坦山氏を講師に迎えたりして、印度哲学という形で進められていきますけども、そういう国立大学における仏教研究とやはりあい応ずるもの、その場を南条先生が大きく開いておいでになる。むしろ国立大学に先立って非常に積極的ないわゆる近代の学という形で、仏教研究を展開なさっている。そういう大切な伝統をもつ大学でありますので、清沢先生はそういう南条先生が受け継ぎ、展開をしていかれたような豊かさをもったものとして、「建学の精神」を語られたに違いないと思うのです。ですから、「開校の辞」が表す建学の精神も、あまり狭く考えないように、むしろ広げていくような関心で、大学の創立の時の願いもみていった方がいいのではないかと思うのです。「開校の辞」で清沢先生が述べた一つの精神と、月樵先生が「樹立の精神」でお述べになったあの願いと、微妙な違いがあるという指摘もありますけども、違いよりも一貫するものを自覚的にとらえていくことの方が、もっと大事だということも思ったりいたします。

ともかくそんなことで、全然準備なしでお話しして、大変申し訳ありませんでしたが、思いつくままに申してお耳を汚したことです。いろいろまたお尋ねやら、ご意見やらをお聞かせいただければ、有難く存じます。

『真宗学事研究』研究会報告
日時：1990年7月24日
場所：研究所会議室

〈指定研究〉

易行院法海と九州学系

――豊後日田をめぐって――

資料整理員　武　内　和　朋

序

易行院法海（大谷派第八代講師）をその代表者として、九州学系と称されるのは、豊後日田長福寺第十世の通元（法海の祖父）、第十一世の宝月（法海の父）の他、日田広円寺の法蘭、そして府内光西寺の円爾等である。これは、高倉の学系とは別に、九州に存在したことから、『大谷派学事史』等で、後に九州学系と称されるようになったのものと思われる。

さて、法海が高倉に学んでいた頃といえば香月院深励（第五代講師）、円乗院宣明（第六代講師）を中心に、学寮はその隆盛期をむかえており、深励・宣明・五乗院宝景（第七代講師）・皆往院鳳嶺（頓慧）（大含の養父）・そして法海の五名が中心となって、各々特色ある学説を発揮し、五大学系と称されていたという。

ところで、そもそも学系という用語は、『大谷派学事史』に、「自ら師事する所を辿りて其處に先進の個性がその學説の上に現れ、自然に特色ある學説を生めるものがあった。卽ち、深勵・宣明・頓慧・寶景・法海等がそれである」と記されるように、師匠と、その学説を受け継ぎ発揚していく門弟との繋がりをいうように思われる。しかし、宣明・頓慧・宝景の三者の師は、実は慧琳ひとりであることや、九州で祖父通元・父宝月の薫陶を受けた法海も、高倉においては、深励と同じく随慧門下であったことを考えあわせると、学系とはむしろ、それぞれ独自の学説を立てたとされる五師のもとに参集した所化の門流、すなわち社中の意として考えられるべきであろう。それを、後になって、学寮の隆盛を表現するものとして、「五大学系」と称したのではないだろうか。なお、高倉の学系は、宝景・法海が深励説に融化し、「三大学系」となり、それらは後にひとつに融合することとなったが、その反面、これによって宗学は固定化されてゆくことになった。

さて、九州学系であるが、ここにいう九州学系は、他の四学系と比べて、「九州」という地名を冠していることが特徴として挙げられよう。これは、法海の下に参集した所化の門流ということを意味するというよりも、高倉学寮における学系の外に、九州に存在した学系ということを意味するものであり、他の四学系と比べて異彩を放つものといえる。そして、地名についてさらにいうならば、九州学系とはいうものの、実際のところ通元・宝月・法海さらに法蘭と、円爾を除いた他の四名が、いずれも豊後日田に深く関連していたことは注目すべき事実である。つまり九州学系とは、いわば日田学系と称されるべきものだったのである。

そこで、本論では、高倉学寮における法海の行実や学説等については割愛し、法海生育の地豊後日田を中心に、法海生育の土壌を考察し、いわゆる九州学系について明らかにしていきたいと思う。

一　九州学系

九州学系と称される学匠については、今迄、ほとんど注目されることはなかったが、今回の研究で明らかになった九州学系の概略を紹介していくことにする。

易行院法海

易行院法海は、明和5年（1768）豊後国日田長福寺に、香光院宝月の三男として誕生し、後に肥後八代光徳寺に伝住している。京都の高倉学寮において、開轍院随慧に師事して研鑽を積み、文化2年（1805）擬講、文化11年（1814）嗣講となり、文政11年（1828）第七代講師五乗院宝景の入寂をうけて、第八代講師に任命され、天保5年（1834）六十七歳にして病死するまで、宗学の振興に力を尽くしている。

しかしながら、法海については、その伝記、自伝や日記等が存在せず、また伝住した八代光徳寺に残っていたと思われる関係文書が、西南戦争によって焼失したこともあり、幼少時、青年時のことはほとんどわかっていな

い。現存する講録や、学寮の日記、講義年鑑等によって、学事上の動向と、その学説を窺うのみである。

通元

長福寺十世で法海の祖父の通元（正徳3年（1713）—天明6年（1786））は、広円寺四世嵩範の子であったが、享保14年（1729）長福寺に嗣子として入寺、養嗣子宝月に寺務を譲った後は、宗学の源流を『易行品』に尋ねて研鑽を積み、安永7年（1778）『易行品』の注釈書である『読易行品』三巻を著した。また、通元の著作については『読易行品』の他、『読易行品題釈分』や『読易行品所引要文』、それに『通元法相録』があり、これらは長福寺に現存している。

なお通元については、宗門の学寮創建に大きな功績があったとする説がある。それは、小栗憲一（小栗栖香頂の実弟）著の『豊絵詩史』に見えるもので、要略すると以下のようになる。

「初めて東本願寺が学寮を創建した時、恵空を初代講師に任じた。恵空は当代九州切っての碩学通元に書を送り、巨刹観世音寺学寮の名義を移す斡旋を懇請した。通元は苦心の末これに成功し、ここに高倉学寮の名が始めて立ったのである。恵空より通元の懇請書簡が現に長福寺に所蔵されている。それは差出人、受取人の部分が欠裂しているが、恵空より通元に宛てたものであることは間違いない。以上祖父東海師の直話を後学のためにここに記しておく」

というものである。ところで、恵空が講師に任じられたのは正徳5年（1715）とされるから、この説によれば学寮の創設は、通説の寛文5年（1665）説を50年も繰り下げることになるのである。

さて、学寮創立に関する研究としては、深田虎雄氏の『高倉学寮草創考』（『真宗総合研究所紀要』第7号）が注目されるが、そこでは通元の説を「観世音寺移籍説」の起源としたうえで、「他派の学林や一般の学塾などで他よりの名跡移籍が必要であったとは聞かず、当派のみそれを唱えるのは著しく必然性を欠く」との理由で移籍説に疑問を呈し、「ただ観世音寺継承を（九州の所化が）生かしたいためだけの無理な理由づけ」であるとして、「九州人の郷土愛が作り育てた伝承」ではないかと推測している。さらに説明を加えると、『豊絵詩史』の著者、小栗憲一は、長福寺十五世として入寺していた時期があり、文中の東海という人は、十一世宝月の末娘の婿で、十三世を継いだ人であるから、『豊絵詩史』のとおり、東海は憲一にとって祖父にあたるのである。また、通元の生年が、実は正徳3年（1713）であることが『長福寺山内過去日記』によって知られ、これによって、正徳5年に通元が観世音寺を移籍させたという説が、全く根拠のないものと断定できるのである。

宝月

続いて、法海の父の香光院宝月（元文2年（1737）—文化2年（1805））である。宝月は通元の養嗣子として、筑後永福寺より十六歳で長福寺に入り、養父通元の薫陶をうけて学んでいる。二十五歳で初めて上京した後、三十六歳からは毎年入京し、開轍院随慧のもとで研鑽を積んでいる。また安永9年（1780）には、父通元の『読易行品』が宝月の尽力により、集会所の許可を得て開板され、同年の夏安居に寮司となった宝月は『易行品』を副講し、通元の学説を全国より参集した所化の前に発揚している。その後、天明2年（1782）擬講に任ぜられ、没後には嗣講を贈られ、これが贈嗣講のはじまりとされている。

宝月の学事史上注目すべき点としては、安永9年（1780）秋、初代講師恵空の編した『教行信証御自釈』を、平安の了行、賀州の宣明、播州の慧見、豊前の道瓊とともに校訂したことが挙げられる。これは、豊後光西寺円爾が、父誓什の志を継いで編纂した『六要鈔会本』（宝暦10年（1760）完成）とともに、それまで拝読・伝授されることはあれ、研究されることはまれであった『教行証文類』を末学の徒にまで広開し、大谷派における『教行証文類』の研究を大きく進展させたものといえるであろう。

また宝月は詩文をよくしたことによっても知られ、その造詣の深さは、後に淡窓が宝月の「舟過姫島」という詩を、九州三絶のひとつと賞讃したことからも窺われる。『香光文集』一冊、『香光詩集』一冊が現存している。なお、宝月には四男五女の子どもがあったが、長男の貞印は早世、次男法憧が十二世となり、三男が法海、十三世は法憧に子がなかったため、宝月の末子シヅの婿として迎えた東海が継いでいる。

法蘭

続いて、広円寺法蘭（享保13年（1728）—寛政6年（1794））である。法蘭の父、五世道寧は、四世嵩範に子がなかったために肥後からの養子として入寺したが、その後嵩範には子ができる。その子が通元なのである。よって法蘭と通元とは、血が繋がってはいないものの非常に近い関係にあったといえる。また第九代講師の雲華院大含は、法蘭の甥にあたることも興味深い事実である。なお、法蘭は『銭塘詩集』三巻を著している。

円爾

最後に府内光西寺の円爾（生年不詳—安永2年（1773））であるが、彼は前述のとおり『六要鈔会本』を編纂したことで知られている。なお、『六要鈔会本』は、安永2年（1773）開板の途中で円爾が死去し、その弟子の豊後法専寺の全鳳が、安永9年（1780）開板を完了させていることが、跋文によって知られる。

また、光西寺は広円寺との関係が深く、円爾の子が病死したため、養嗣子に法蘭の弟、円嵩を迎えて十三世とし、また法蘭の次男、円解を迎えて十五世としている。円解は法海とほぼ同時代の人で、嗣講まで進んだ人である。

以上のように、九州学系と称される人々を簡単に紹介してみたが、ここにいう九州学系の学匠たちが、宗学上独自の学説を発揚し、伝承したとは考えにくい。ただ『易行品』に関しては、通元が『読易行品』を著し、宝月によってそれが学寮で開講され、さらに法海も文化7年(1810)の秋講で『易行品』を開講し、そこで「此度ノ講筵ハ其科ヲ分チ義ヲ釋スルコトハ多分讀易行品ヲ定量トシ」と述べているように、通元の学説を三代にわたって継承していることが窺われるのみである。

また、資料①の系図によってわかるように、彼らが広円寺を中心にして、何らかの関係を有していることは今回初めて明らかになった。それに加えて、大含、円解といった学匠も広円寺の流れを汲むものであり、当時の九州の学匠が、学問上の師弟関係のみではなく、強い血縁や寺縁によって繋がれていたことがわかる。それにしても、これだけの学匠が日田から生まれたということは、日田という町の環境と関連があると考えることはできないであろうか。そこで次章では環境に着目し、彼らが何らかの形で関係した豊後日田について考えることにする。

二　豊後日田

日田は現在の大分県の西端に位置し、筑後川の上流を占める町である。

ここで、日田の歴史を辿ってみると、徳川政権下において極めて重要視されていることがわかる。すなわち、元和2年(1616)九州で初めての譜代大名として大垣城主石川忠総が日田に入部し、日田藩の成立をみたのである。しかし、三代将軍家光は熊本加藤氏を改易する一方、九州に六つの譜代藩領を形成したために、日田藩はその一定の歴史的役割を果たし、寛永10年(1633)より大名預所、6年後には代官支配地となり、以後ただ一度親藩領となった例外を除いて、幕末に至るまで天領として幕府の直接支配のもとにあったのである。

ところで、徳川幕府の経済的基盤は、天領からの年貢収入の他、全国の直轄都市からの流通、鉱山からの貨幣発行による収益などであったが、日田の支配高は最盛時でも16～7万石で全国天領の4％に過ぎない。つまり、天領日田の存在意義は年貢収入にあるとはいえないのである。すなわち日田は、西に筑紫、東に府内、北に中津、南に肥後を望み、九州の流通の中心となる一方、周辺外様大名の監察のための政治上極めて重要な地であった。幕府が九州最初の譜代大名を日田に入部させたことや、明和4年(1767)日田代官が西国筋郡代に昇格して、九州天領の中枢となったことは、まさにその証明といえよう。

続いて注目されるのは日田の経済的発展である。すなわち、流通の中心地にあって成長した日田の商人は、近世中期以降、江戸、大坂、長崎へ回送される金銀、米穀等の財務を掌る御用達商人となったのである。そして、これら御用達商人は「掛屋」と呼ばれ、代官所の公金を無利子で融通する特権を利用して、その資本を九州諸藩に貸し付けたばかりか、諸藩の財政にまで関与し、生臘などの藩専売制に介入するなどの大きな権力を握ったのである。この日田における掛屋の資本は、当時「日田金(ひたがね)」と呼ばれ、九州一円のみならず、遠く京都、大坂からも、莫大な資本を日田に集中させることになり、日田に大きな経済成長をもたらしたのである。

以上のような豊かな経済成長が、日田の思想文化にも影響を与えていることは明らかである。例えば、長福寺と日田商人との関係を挙げてみよう。宝月筆の『長福寺開基代々之事』によると、第九世住職体印の代の記述のなかには、

常灯堂　からつや　享保十一丙午二月
石ノ塀　からつや
南ノ塀　伏見屋宗故

とあり、第十世住職通元の項には、

経蔵再建　からつや
寮　升や

という記録がみえ、当時の日田商人が長福寺に対して多額の寄進を行っていたことが窺える。そして通元は、13年間にわたってこの学寮で『易行品』の研究に打ち込んだことが『豊絵詩史』に伝えられている。

ところで、宝月、法蘭の頃の日田の様子は、『豊絵詩史』には

法蘭者(中略)與師(宝月のこと)協力
以振興宗風、化導洽及、士庶靡然信從
念佛之聲、相接于道路也

と記されている。また広瀬淡窓の懐古録『懐旧楼筆記』には、

平岩氏當縣ニ當ラレシ内。豆田市中ノ者ニ經書ノ講釋ヲ聞カシムヘシトノ命アリ。廣圓寺法蘭上人ヲ請ヒテ。長福寺ニ於テ。月二三度ノ講アリ。隈町モ是ニ倣ヒ長福寺寶月上人ヲ請ヒテ。講ヲ始メタリ。

とあることから、宝月と法蘭は互いに協力して、門徒教化はもとより、日田の学問の振興に大いに貢献したことがわかる。そして当時の日田が、「市中ノ者」にまで好学の雰囲気の浸透した文化的な町であり、このような土壌が法海や淡窓を生み、後の咸宜園の隆盛へと繋がったのである。

広瀬淡窓

広瀬淡窓（天明2年（1782）—安政3年（1856））が、咸宜園を開設し、著名な教育者となることができたのも、やはり日田という土壌なしに考えることはできない。すなわち、それは長福寺の諸僧と淡窓との関係である。『懐旧楼筆記』によれば、淡窓は六歳で父母より読書・習字を、七歳で父から『孝経』の句読・四書を習っている。そして八歳にして、

> 長福寺ニ行キ。住持法憧上人ニ謁セシメ。詩經ノ句讀ヲ受ケシメ玉ヘリ。是門ヲ出テ師ニ從フノ始リナリ

と記されるように、法海の兄法憧の教えを受けているのである。また淡窓二十四歳にして長福寺学寮を借りうけ、始めて私塾を開設したことからも、その関係が知られる。

また、淡窓と日田の経済成長とはとりわけ緊密な関係にある。つまり淡窓は、日田の有力な掛屋、博多屋の長男なのである。彼は幼少より病弱であったために家業を弟に譲り、勉学を志したのであるが、その淡窓に十分な教育を施し、治療のために前後二十数名の名医を各藩から招き、さらに淡窓が大規模な咸宜園の運営ができたのも、その背景に莫大な博多屋の経済力があったからである。また、後に講師となった雲華院大含も、広瀬家に寄寓して淡窓に漢詩を教えていた松下西洋の門を叩いており、日田で淡窓とともに勉学に励んでいたことは興味深い事実といえよう。

咸宜園

淡窓によって文化14年（1817）に開設された咸宜園は、塾名に掲げるとおり「みなよろし」という、自由で全ての人々に開放された理念をもっていた。それは門弟の年令、学歴、さらに身分までも奪い、唯一学業成績によってのみ優劣を決定するという、封建社会の常識を覆すものであり、その学風に憧れて全国から参集した門弟の数は、淡窓時代だけで2915名にのぼっている。このような淡窓の教育理念と、それに基づく咸宜園という先進の教育機関は、日田の人々にも多大な影響を与え、淡窓時代だけで358名もの門弟が日田郡内から集まった。これは日田の人々の学問関心の高さを物語るものであり、淡窓が日田の思想文化以上に果たした役割は、実に大きなものがあったことが知られる。

さらに、咸宜園の門弟の三分の一は僧侶であり、僧侶の三分の二、すなわち淡窓時代では600名以上が真宗の僧侶であったと推測されていることは驚くべきことである。すると600名の真宗の僧侶のうち、約半数の300名が大谷派の僧侶と考えられよう。咸宜園の教育課程が、漢文の素読を極めて重要視したことを考えると、咸宜園で十分に漢籍に親しんだ大谷派の僧侶が、高倉でそれを生かしつつ宗学を学んだことが推察されよう。

それでは何故、僧侶たちは淡窓の門をくぐったのであろうか。考えられる理由としては、自由闊達で先進の教育機関である咸宜園に対する僧侶たちの憧憬が挙げられよう。しかも、貨幣経済の発展に伴って豊かな経済力を持った僧侶は、多数参集することが可能だったのである。また、当時の宗学のなかに儒教倫理が混入、融合していたこともあり、僧侶は儒学の専門の教育機関である咸宜園に集まったとも考えられる。さらに、淡窓が福岡の亀井南冥、昭陽に学んだこともあり、仏教と対立した朱子学ではなく古学に近い学風をもち、仏教批判を行っていなかったことも、僧侶が多数参じた理由となろう。

まとめ

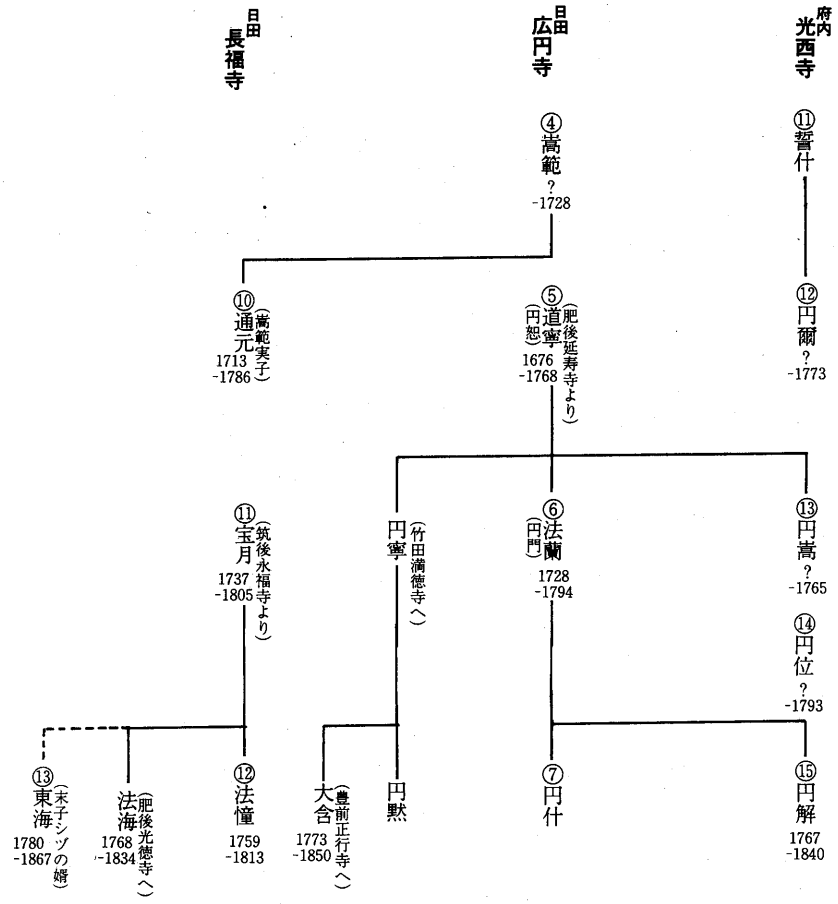
今回「易行院法海と九州学系」と題して考察してみたのであるが、その背景には、日田という環境、すなわち生育の土壌があった。とりわけ、宝月や法蘭の時代の日田の学究的土壌が、法海や淡窓という実りとなったと考えることができよう。思うに、九州学系とは、前述したとおり、宗学の体系的な一系譜を指すものではなく、強い血縁、寺縁関係にあった学匠の一群であり、極言すれば、日田という土壌そのものと思えてならない。それは豊かな経済的基盤に支えられ、通元、宝月、法蘭などを中心として育まれた日田の精神風土であろう。この土壌は、法海を通して高倉へと連なり、淡窓を通してその地域を一層豊かにするとともに、全国へと拡がり、そして高倉とも繋がったのである。講師法海の宗学と、教育者淡窓の儒学、これら双方を学んだ僧侶が高倉学寮に多数存在したことが推察されるが、彼らにとっては、法海、淡窓の二者を生み出し、さらに大含や円解も幼少時に学んだ僻遠の町日田が、学問の先進地域として注目すべき存在となっていたに違いない。そしてこのことが、通元、宝月、法海の三者を中心とした宗学の系譜を、後に九州学系と名づける要因となったのではないかと思われるのである。

最後に、今後の課題としては、九州学系の各寺院での調査や法海の思想面での位置づけなどが考えられるが、最も興味深い課題として、大谷派の諸僧が近世の教育史上に果たした役割と位置づけ、ということが挙げられよう。当時は一般民衆の教育機関といえば、寺小屋があるくらいで極めて不十分なものであった。そのような状況にあって、広瀬淡窓の手によって、一般民衆（女性を含む）に開かれた教育機関が創設されたことの意義は大きい。そして、淡窓のもとに学んだ僧侶が何を吸収し、何を庶民に伝えたのか。高倉学寮と咸宜園の関係を明らかにするとともに、学寮の日本近世教育史における位置づけを行うことが、重要な課題であるといえよう。

以上のように、高倉を離れて学匠生育の土壌を探るという視点が、主として高倉学寮における事件史、人物史

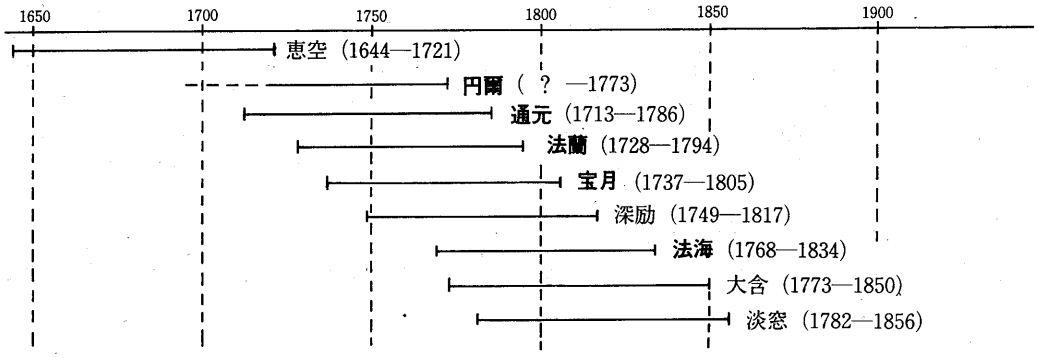
的な性格の濃い学事史を、より豊かな公共性をもつものとするためのひとつの要因となることが、今回の研究によって指摘できると思うのである。

①九州学系関係寺院系図



注. 黒線は血縁関係を示す。
○は当該寺院の第何世であるかを示す。
円位については血縁関係は不明である。

②九州学系生没年表



注. 九州学系と称されるのは円爾・通元・法蘭・宝月・法海の五師であるが、参考のために恵空等の生没年を載せた。

『大学開放と生涯学習の研究』研究会報告　〈指定研究〉
日時：1990年11月４日
場所：国立京都国際会館会議場

第２回生涯学習フェスティバルに参加して

—京都会館におけるシンポジウム内容報告—

嘱託研究員　土　門　政　和

1989年千葉県千葉市で行われた生涯学習フェスティバルは、本年会場を京都市に移して第２回生涯学習フェスティバルが開催された。開催期間は10月31日(水)～11月５日(月)であり、主な会場としては、国立京都国際会館、京都府総合見本市会場、京都会館等であった。

ここでは11月４日(日)午後１時30分より京都会館会議場で開催されたシンポジウムの内容を報告する。

本シンポジウムは「生涯学習と大学」のテーマのもと、コーディネイターとして西島正則氏（京都大学総長)、パネラーとして古寺雅男氏（立命館大学教授)、上田正昭氏（社会教育委員会議議長)、小尾信彌氏（放送大学副学長)、上村多恵子氏（詩人・京南倉庫社長）の５名によって進行された。

古寺氏は、生涯学習の目的を資格取得と見ることに疑問を示され、ボン大学を例に、大学がまず学習の場としての条件を整えるべきことを主張された。そして生涯学習の場は、資格のためのものではなく、学習を志す者の欲するものを確実に教えることのできる場である必要性を説かれ、素直な学習意欲そのものを大切にしなければならないことを強調しておられた。

上田氏は、京都の歴史・文化に則した生涯学習を展開してはどうか、という意見を示された。そしてそれは“生きがい”に結び付くようなものでなくてはならないことであり、そのためには「いつでも、どこでも、誰もが」学べるシステムを日本の歴史から学ぶべきことを主張された。またそれを実践する姿勢として、講座による一つのテーマは３～４回継続されるべきであり、そうした過程から討論が生まれるものである、と自覚すべきことを強調された。更に学ぶ側にも京都の伝統に適した場を造ろうとする自覚が必要であることを示された。

小尾氏は、放送大学の目的・役割を中心に意見を述べられた。すなわち「生涯教育」と「高等教育」の普及を目的として放送大学は成ったが、その２つの柱を成り立たせるためには「いつでも、どこでも、誰でも」という視点が絶対に必要であることを説かれた。そしてその内容は実務面よりむしろ教養面に役立つようなカリキュラムが組まれているということであった。また３万人の学生のうち30歳以上の人が全体の60％以上を占めている事実に注目され、生涯学習の役割を果たしていることを強調された。さらに放送大学では、オープン・ユニバーシティ、遠隔教育を理想とし、将来的には、学籍のない人にも全国的な範囲で受信可能となる体制を目指しているという。

上村氏は、一般社会人の立場から生涯学習の場を、自らの生涯を如何にクリエイティブにエンジョイするのかという視点からアプローチできるところでなければならない、と主張された。それには大学の教員の意識の改革も大切で、現代の若者の心を捉らえているものは一体何なのかという点に焦点をあてて研究すべきことを強調された。次の新しい文化を造って行く若者をもっと中心に据えて大学というものを考えてほしい、との意見であった。

如上、まとめて言えば、「生涯学習」と「大学」との関係を考える場合、何よりもそこには「大学とはなにか」という大学自身の問いかけが必要で、その問いかけに基づいた結論のうえに立った上での「生涯学習」でないと意味がない、ということになろう。其の際注意しなければならないことは上田氏が言われる通り、個々の自覚を基本に据えることである。したがって大学は大学の、学習者は学習者の自覚があって初めて、生涯学習の“場”足り得るのではなかろうか。今回のシンポジウムを通じて感じたことは、「大学」と「生涯学習」という二つの概念は決して個々に存在するものではないということであった。つまり、「大学」を考えるということは実はさまざまな形で「生涯学習」と関わっているのであり、我々はこの重大な課題を今まで見過ごしにしてきたのではなかろうか。例えば今回のシンポジウムはそのテーマが「生

涯学習と大学」であって、「生涯学習と大学開放」となってはいないという点に注目する必要があろう。生涯学習と大学が結び付けられる場合、大学の役割は“開放”であると単純に考えられがちであるが、実はそれだけで事足りるとは到底考えられない。もしその両者の結び付きから発想される“開放”が、大学が象牙の塔であるという単純な認識から起こった反省にのみもとめられるならば、日本の大学の将来は危ういであろう。大学が大学であろうとする時、“開放”の語は其れ程狭い意味で用いてはならない筈である。こうした点を反省・自覚することによって、「大学」ははじめて真の「生涯学習」の“場”となるのであろう。

『大学開放と生涯学習の研究』研究会報告
日時：1990年11月５日
場所：国立京都国際会館会議場

〈指定研究〉

第２回生涯学習フェスティバルに参加して（Ⅱ）

―「第２回　大学開放の在り方に関する研究会」報告―

嘱託研究員　　籠　　弘　信

去る11月５日、第２回生涯学習フェスティバル「まなびピア'90 in 京都」の一環として、文部省生涯学習局主催の「第２回　大学開放の在り方に関する研究会　―これから、大学開放をいかに進めるか―」が、国立京都国際会館に於いて開催され、本研究班から木村宣彰研究員、土門政和嘱託研究員、籠　弘信嘱託研究員、中川真二研究補助員の４名が参加した。

全国より大学・短大・高専併せて参加約350校・延べ約500名が出席したこの研究会は、午前10時30分に開始され、以後、

(1)　公開講座実践報告
「リカレント教育による人材の育成」
朝倉　祝治（横浜国立大学教授）

(2)　施設開放実践報告
「地域スポーツの振興のための大学の開放」
塚越　義行（鳴門教育大学庶務課長）

(3)　公開講座実践報告
「大学を開くということ」
佐野　哲郎（京都大学学生部長）

(4)　公開講座実践報告
「米国における大学開放」
オーテス・ケーリ（同志社大学教授）

(5)　基調講演
「生涯学習における大学の役割」
衛藤　瀋吉（亜細亜大学・日本経済短期大学学長）

の日程で進行し、福田昭昌文部省生涯学習局長の挨拶で、午後４時頃終了した。

以下は、各報告者の講演の要約を述べる。

１．「リカレント教育による人材の育成」

ＯＥＣＤ、中央教育審議会、臨時教育審議会等によって指摘される現在の教育制度の問題点を、工学教育の観点から要約して、朝倉氏は、

(1)画一的教育によっては開花しなかった潜在能力の高等教育による開放の方法
(2)受動的学習形態から能動的学習形態への変革とそれによる学習効率の改善
(3)急速に変化する高度産業社会のニーズに対応できる教育システムの構築
(4)追従型ではなく創造型人材の育成方法

等を挙げている。

現在の高学歴社会における高等教育の量産化・画一化状態の中では個性重視の教育が行なわれない。それ故、学生は学習に対する動機や意欲が不明確のまま就学し、学習はあくまで受動的形態にとどまって、その教育効率はきわめて低い。それに対して卒業後、労働経験を積んだ社会人は、問題意識も鮮明であり、学習の動機も明確であるにもかかわらず、教育機会の固定化されている現状においては就学の機会もなく、それゆえ刻々変化する高度産業社会に対応しきれない。以上が朝倉氏の分析による現代の教育制度の孕んだ問題点である。

そしてこれらの問題に応答し、解決する教育方法としてのリカレント教育を提唱するのが、朝倉氏の今回の報告の主題であった。

ＯＥＣＤの命名による「リカレント教育」とは、回帰教育、還流教育とも呼ばれ、端的に言えば、仕事と学習

を周期的に循環させる教育方法である。すなわち、すでに学校教育を終えた社会人が職場と大学を周期的に往復することによって再教育を受ける教育方法を指すものであり、それに対して従来の教育はフロントエンド教育―一方向教育、非回帰教育―と呼ばれる。

そのリカレント教育の実践の一環として、横浜国立大学における公開講座とその成果が報告された。

横浜国大では短期公開講座(6日間)、長期公開講座(15週・75日)、出張公開講座(3日間)、「神奈川テクノチェア」(神奈川県等との共催)の4つの公開講座を開催しており、その結果、社会人にとっては、大学の持つ最先端の研究・技術を取得し、また新たに仕事上の人間関係を拡大できるなどの、大学にとっては、社会人の持つ明確な問題意識と学習意欲に学生が啓発を受ける等の成果が見られた、とのことである。

それらの成果をもとに、朝倉氏は、今後の問題点も含めて、

(1)大学内部からの開放努力
(2)社会ニーズの大学人への周知の努力
(3)企業の大学を利用する姿勢(人材供給源)の改善
(4)文部省の大学および社会に対する精神面からの指導
(5)文部省の大学・社会人に対する実務面からの援助

を提言された。

2.「地域スポーツの振興のための大学の開放」

塚越氏は、鳴門教育大学におけるスポーツ施設(野球場、テニス・コート)の地域住民への貸し出しについて、大学開放に至る経緯と諸問題の調整の過程、および現在の使用状況などを報告された。

鳴門教育大が大学開放に至る経緯は、大学創設当初からの文部省の「開かれた大学」という構想がまずあり、住民のニーズとしてもすでに当初から期待されていたという背景があった。1987年の行政監察を契機として一気にその気運が高まり、規約や安全管理等の諸問題を調整して、同年12月には施設開放の要領ができ、施設貸し出しが実施される、という迅速ぶりであった。

塚越氏はさらに、今後の施設開放の展望を述べるとともに、大学開放におけるもっとも大きな障害は学内的問題であり、総論としては賛成の雰囲気であるが、窓口セクションや安全管理、授業との関連といった各論においては非常に消極的になってしまう、といった学内意識の改善こそ何よりの課題だとして、学内の意識改革と文部省の積極的なリーダーシップを提言して、報告を終えた。

3.「大学を開くということ」

佐野氏は、京都大学の諸機関における公開講座の内、大学として行なう2つの公開講座(京都大学市民講座・京都大学春秋講義)を紹介し、

(1)大学の公開講座とはどういうものか

として公開講座にかかわる大学としての姿勢を、大学開放とは、必ずしも実務的でない学問をまさしく好きだから学ぶという人にその機会を提供することに他ならない、と規定し、さらに大学から与えるというのではなく、異文化との接触により目を開かされるという相互性をこそ考え、「お互いさま」をこそキー・ワードにすべきだと押さえられた。

そしてまた、大学とは、いかに「虚学」(実学・実務的な学問でない学の意)が重要であるかを教えるところであり、大学開放は知識の切り売りでなく、京大の研究内容の一端を知ってもらう営みであるとも押さえられた。

(2)講師と受講者の関係

として、アンケートの結果や受講者の真摯な学習態度を、一般学生のそれと対比して語られ、

(3)今後の進め方について

として、人間集団の同質性は好ましくないとして、社会人学生の募集や授業の開放についても言及された。

4.「米国における大学開放」

アメリカにおける大学開放を語るに先立ってケーリ氏は、日米の大学事情の根本的相違を述べられた。

すなわちアメリカに存在する1400校弱の4年制大学の8割以上が、都会ではなく、小都市にあって、college town を形成しているという点である。

日本の大学が都市部にある、いわゆる通勤大学で、そのカリキュラム形態も、1週1度(2時間)の講義であるのに対し、アメリカは2日に1時間の週3回講義、さらに週1時間の実験時間があり、前期4科目・後期4科目の年間8科目を週4時間ずつ履修するのである。

そしてその所在地の特性故に、全寮制が基本であり、教員・学生いずれもがその college town に居住し、日常生活が完全に大学を中心として回転することとなる。それ故図書館は深夜まで学生に開放され、その管理(閉館施錠)も時として学生に委託される。

氏はさらに自らが在職するアーモスト・カレッジを例に取り、近隣の4大学との積極的な単位交換授業の現状を紹介した。そこでは5大学間を30分毎にスクールバスが巡回し、積極的な交換授業が行なわれ、それぞれの大学がそれぞれの優秀な分野を譲り合って、補完し合いつつ自己の特徴を伸ばし合う、といった協力体制が敷かれているのである。氏はこのようなアメリカにおける大学開放の現状を「内側から開放している」と評した。

5.「生涯学習における大学の役割」

衛藤氏は、社会のニーズに応える大学という亜細亜大学の現在の理念をまず述べ、それを、

○人間性の教育
○英語教育
○OA機器
○国語教育

という具体的内容で述べられた後、その「人間性の教育」を近隣に愛される大学として押さえて、その実践の一環

として大学を開放する、という亜大における大学開放の位置付けを行った。そして将来的に亜大を武蔵野市の生涯学習の根幹にしたいとの願いを語られた。

その後、

(1)通過儀礼としての大学から「学習」の場としての大学へ

として、学生の進学動機のトップが「友人を得たい」であることを紹介し、その現状にいかに対応すべきかという観点から、Alex Dickson の「イギリスでもっともよく学生が反応したのは戦争直後であり、それは帰征兵士の学習意欲によるものであった。それ故学生を高校卒業後、ボランティア活動に従事させた後進学させれば教育の効果が上がる」というコメントを紹介し、亜大における社会人入試制度の実施とその具体的成果として、社会人学生の積極的な授業態度と一般学生への影響、さらには教員の授業意欲の増進といったメリットを報告された。

そして、大学はもはやエリートの集まりでなく、多様な人材の集まる普通の市民のコミュニティーとしての大学であるべきだとして、

(2)知識・技術教育の府から多彩な市民のコミュニティへ

を主張して、大学開放の推進を訴え、その具体的方策として社会人入試の他、一芸一能入試やボランティア活動のすすめなど、亜大の実践をあげ、

(3)大学「氷河期」の歴史的役割

として、競争の激化する時期にこそ、大学教育改革の好機であり、生涯学習の府としての大学を確立すべきであると提言された。そしてさらには大学開放のための具体的第一段階としての図書館、スポーツ施設の開放等も指示された。

以上が今回の研究会における「報告」の概要であるが、今回の報告者は、ケーリ教授を除いてはいずれも、それぞれの大学で大学開放を積極的に推進する立場にある方々であり、いずれも大学開放のもたらすメリットを強く主張されていた。その論調には、あたかも大学開放によって現在の大学教育の抱えるさまざまな問題が一挙に解決するかのような感があった。そしてまたどの発表者も異口同音であったのは、大学開放を推進する上での大学内部でのコンセンサスを得ることの難しさを語られ、学内意識の改革の必要を説かれていた。

大学内部でのコンセンサス、それは具体的には安全管理や職務分担の問題であり、内面的にはそれぞれが大学をどのようなものとして性格づけ、了解していくかという大学人個々の大学観の問題でもある。

しかし、このような研究会の場では、往々にして、大学開放に消極的な大学人の存在を嘆き、権威主義的であるとか、エリート意識や古い大学観に囚われた人々として批判する傾向にある。大学開放が現在の教育問題に対する有効な方法であるということを否定するものではないが、一概にそう断言してよいものか、という疑問も残る。

しかも今回の報告では、その障害克服のために文部省の強力な指導、リーダー・シップを要求した報告者（朝倉氏、塚越氏）もおられ、大いに疑問を感じないではいられなかった。

この研究会自体が文部省の主催であり、報告者もケーリ氏を除いて国立大学の関係者ばかり（衛藤氏も元東大教授）であり、生涯学習ブームに乗った文部省の大学開放ブームの喧伝事業といった感もなきにしもあらずであった。

大学開放とは実に大学の存在意義にまでかかわる問題であり、文部省主導のブームに流されることなく、また開放即問題解決といった短絡的発想でもなく、大学個々の実情に即して、大学の存在意義と今後の方向性とを視野に入れた、かなりの見識が必要である、という感を新たにした今回の研究会参加であった。

研究所彙報

研究所委員会

9月19日(水)　午前10時　　於　真宗総合研究所会議室
議題　公開講座の実施について
10月24日(水)　午後2時30分　於　真宗総合研究所会議室
議題　1.「特定研究」研究組織について
2.「一般研究」の募集について
12月20日(木)　午後1時　　於　真宗総合研究所会議室
議題　1. 1991年度「特定研究」について
2. 1991年度「一般研究」について

「指定研究」チーフ連絡会

11月22日(木)　午後4時10分　於　真宗総合研究所会議室
議題　「指定研究」の総括について

事務連絡会

12月13日(木)　午後2時30分　於　真宗総合研究所会議室
内容　来年度の「特定研究」について

「指定研究」全体会議

〈真宗学事研究班全体会議〉
10月24日(水)　午後4時10分　於　真宗総合研究所会議室
内容　1.「西日本大学史担当者会」報告
2. 作業進捗報告
3・その他
〈海外仏教研究班全体会議〉
11月6日(火)　午後4時10分　於　真宗総合研究所会議室
内容　研究成果のまとめについて
12月21日(金)　午前11時　　於　真宗総合研究所会議室
内容　私学振興財団に対する成果報告について

研　究　会

〈海外仏教研究〉
11月6日(火)　午後4時10分　於　真宗総合研究所会議室
「アメリカにおける仏教研究者の視点」
海外仏教研究班チーフ・教授　長崎法潤氏
12月21日(金)　午前10時　　於　真宗総合研究所会議室
「英訳教行信証についての一局面
—鈴木大拙訳 The Kyogyoshinsho を中心に—
海外仏教研究班研究員・助教授　安富信哉
〈大学開放と生涯学習の研究〉
8月6日(月)　午後2時　　於　真宗総合研究所会議室
「公開講座（開放セミナー）について」（以下同じ）
8月20日(月)　午後1時　　於　真宗総合研究所会議室
8月22日(水)　午後5時　　於　真宗総合研究所会議室
8月27日(月)　午後5時　　於　真宗総合研究所会議室
8月31日(金)　午後5時　　於　真宗総合研究所会議室
9月10日(月)　午後1時30分　於　真宗総合研究所会議室
9月14日(金)　午後5時　　於　真宗総合研究所会議室
9月21日(金)　午後6時　　於　真宗総合研究所会議室
10月11日(木)　午後6時　　於　真宗総合研究所会議室
10月18日(木)　12時　　於　真宗総合研究所会議室
11月7日(水)　午後4時　　於　真宗総合研究所会議室
11月14日(水)　午前11時　　於　真宗総合研究所会議室
11月26日(月)　午後5時30分　於　真宗総合研究所会議室
12月21日(月)　午後1時　　於　真宗総合研究所会議室

「開放セミナー」発足式

9月25日(火)　午後5時　　於　真宗総合研究所会議室

「開放セミナー」開催

寺川俊昭学長「親鸞の世界—『教行信証』—」
10月20日(土)　午後2時00分　『教行信証』の志願
11月10日(土)　午後2時00分　真実の言葉との出遇い
11月22日(木)　午後6時30分　大いなる無量寿経
12月6日(木)　午後6時30分　救いを求めるもの
12月13日(木)　午後6時30分　如来の回向
岩田慶治教授「文化人類学から見た自然、『風景』、宗教」
10月27日(土)　午後2時00分　神秘経験
11月17日(土)　午後2時00分　遊　び
12月1日(土)　午後2時00分　風　景

日本私学振興財団の監査

11月14日(水)午後1時より日本私学振興財団の「学術研究振興資金に係わる対象事業実施状況調査」（監査）がおこなわれた。

日本私学振興財団「学術研究振興資金」の補助を得ていた特定研究「海外仏教研究」の平成元年度関係書類等について監査が行なわれ、適正な実施状況が認められた。

人　事

平成2年10月1日付けで真宗総合研究所所長の更迭があった。渡辺貞麿教授（国文学）に替わって武田武麿教授（宗教学）が研究所長に就任された。

また、10月31日付けで真宗学事研究班の研究補助員であった山口昭彦氏が、一身上の都合で、その職を退くことになった。

研　究　所　報　第25号
1990年12月31日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603　京都市北区小山上総町